

今帰仁村今泊のフクギ屋敷林と集落景観

—現地調査報告—

京都府立大学文学部歴史学科
共同研究員
奥谷 三穂

はじめに

本報告は、上杉和央科研費（基盤研究（C）20K01160）「文化的景観の価値を活かした地域づくりに向けた基礎研究（研究代表上杉和央）により、2022年度から2023年度において実施した沖縄県今帰仁村及び本部町での調査についてその概要をまとめ、報告として記録するものである。

本調査の目的は、2019年に重要文化的景観に選定された「今帰仁村今泊のフクギ屋敷林と集落景観」の保存・活用を図るために、今後どのような考え方や方法で進めていけばいいのかを検討するため、今帰仁村及び隣接する本部町において調査を実施し、その結果をフィードバックすることにある。

本研究では2022年度から「文化的景観の価値を活かした地域づくり」として二つの視点を持ちながら沖縄県以外の本土各地でも調査研究をおこなってきた。二つの視点のひとつは本質的価値をどうとらえるのかという基本論の視点であり、もうひとつは具体的にどのような方法で地域づくりに落とし込んでいくのかという計画論の視点である。

今帰仁村及び本部町での調査においても、二つの視点を持ちながら現地調査に臨んだ。

2022年度から2023年度に当該地域において実施した調査は、次のⅠ～Ⅳのとおりである。

- Ⅰ．今帰仁村今泊のフクギ屋敷林の現地調査と聞き取り調査
日時：2022年6月29日（金）

場所：今帰仁村歴史文化センター、今泊集落、海岸、今帰仁城跡周辺

日時：2024年2月28日（水）

場所：今帰仁村歴史文化センター

- Ⅱ．今帰仁村今泊地区でのワークショップ

日時：2023年6月22日（木）

場所：今泊区地域活動活性化拠点施設

- Ⅲ．一般社団法人今帰仁村観光協会への聞き取り調査と中央公民館現地調査

日時：2023年6月23日（金）

場所：一般社団法人今帰仁村観光協会

- Ⅳ．本部町のフクギ現地調査（備瀬地区・瀬底地区）

- 1. 一般社団法人本部町観光協会への聞き取り調査と備瀬地区のフクギ並木調査

日時：2024年2月26日（月）

場所：備瀬地区及び一般社団法人本部町観光協会

- 2. 瀬底区への聞き取り調査と瀬底地区のフクギ・拝所調査

日時：2024年2月26日（月）～27日（火）

本稿では、上記Ⅰ～Ⅳの順に調査概要を記述し、最後にⅤ．全体のまとめを記述する。

1. 今帰仁村今泊のフクギ屋敷林の 現地調査と聞き取り調査

【1 回目】

日時：2022 年 6 月 29 日（金）

〔聞き取り調査〕午前

〔現地視察〕午後

場所：〔聞き取り調査〕今帰仁村歴史文化
センター

〔現地視察〕今泊集落、海岸、今帰
仁城跡周辺

調査者：上杉和央（京都府立大学文学部
准教授）、川瀬貴也（同教授）、奥
谷三穂（同歴史学科共同研究員）

* 報告書作成：奥谷三穂

【2 回目】

日時：2024 年 2 月 28 日（水）

場所：今帰仁村歴史文化センター

* 2022 年の調査から 2 年経ったた
め、現状確認のため再訪問した。

1. 重要文化的景観に関する基礎情報

名称：今帰仁村今泊のフクギ屋敷林と
集落景観

所在地：沖縄県国頭郡今帰仁村

選定：2019 年 6 月 21 日

（参考）

今帰仁村景観計画：2013 年 3 月策定

今帰仁村景観条例：2013 年 9 月施行

今帰仁城跡・世界遺産（「琉球王国のグス
ク及び関連遺産群」）登録：2000 年
12 月 2 日

概要：

今泊集落は、三山鼎立時代に山北王の居
城であった今帰仁城が三山統一や薩摩の琉球
侵攻によって廃城となり、今帰仁城北側一帯
にあった今帰仁ムラと親泊ムラが移動してで
きた集落である。移動に伴い今帰仁ムラの神
ハサギであるハサギンクワと親泊ムラのフ
プハサギも現在の地に移され、それぞれに祭
祀がおこなわれている。

地形は図 1 のとおり、円錐カルストが広
がる山地には、琉球七御嶽の一つであるクバ
の御嶽があり、今も山地から今帰仁城内、農
地、集落内、海岸までの地域全体を祭祀空間

として年中行事がおこなわれ、地域の人々の
コミュニティを結びつける大切な役割を担っ
ている。集落移動後も農業と漁業を中心とし
た生活・生業が営まれ、山地から農地、海岸
に至るまでの土地利用の配置を大きく改変す
ることなく、集落を取り巻く自然環境とうま
く付き合いながら生活を営んできた。

文化的景観の重要構成要素は図 2 のと
おり、山から海辺へ至る生活・生業・祭祀の
場などである。集落内の重要構成要素は図 3
のとおり、祭祀に係る建造物をはじめ街路、
樹木、道路、井戸、石取當などである（写真
1～13）。集落内の道路は図 4、写真 14 の
とおり、屈曲したり交差点が食い違ったり、
家屋は南向きに建てるなど琉球列島において
発展した独特の風水地理を色濃く残している。
またフクギ並木も風水地理に基づいて植栽さ
れたもので、悪い気を防ぎ良い気を留める役
割と防風、防火、防潮等の防災機能も併せ持
っている。

以上のように、今泊の集落景観は、自然
特性に対応したフクギの集落景観が保たれ、
今帰仁城下から集落移動の歴史に由来する
集落形態と民俗文化が色濃く残されており、
人々の生活及び、この地の風土によって形成
されたかけがえのない価値を有する文化的景
観である（『今帰仁村今泊のフクギ集落景観
調査報告書・保存計画書』2018 年、今帰仁
村教育委員会）。

2. 聞き取り調査の内容

< 2022.6.26 インフォーマント >

玉城靖（今帰仁村教育委員会・今帰仁村
歴史文化センター館長）

平良成健（今帰仁村役場建設課土木建築
第 1 係）

松田竜治（今帰仁村役場建設課土木建築
係）

仲原雅宏（今帰仁村役場企画財政課課長
補佐）

< 2024.2.28 インフォーマント >

玉城靖（今帰仁村教育委員会・今帰仁村
歴史文化センター館長）

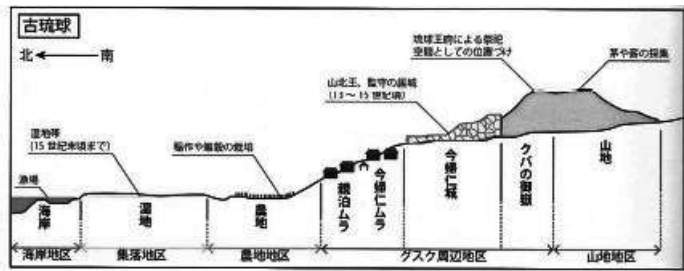


図1-5 古琉球の土地利用断面

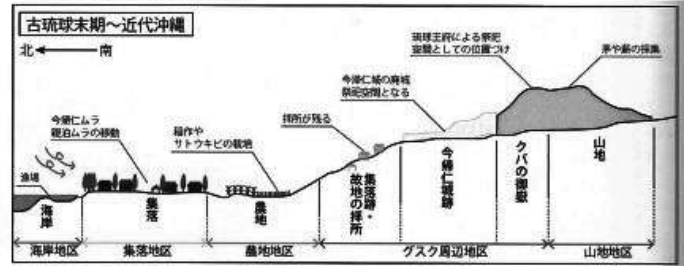


図1-6 古琉球末期～近代沖縄の土地利用断面

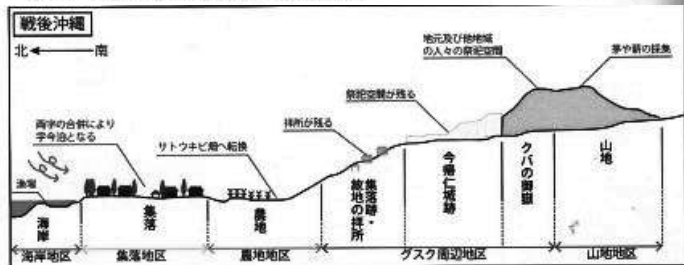


図1-7 戦後沖縄の土地利用断面

図1 土地利用の変遷（古琉球→古琉球末期～近代沖縄→戦後沖縄）
『今帰仁村今泊のフクギ集落景観 調査報告書・保存計画書』II-6-II-7より抜粋

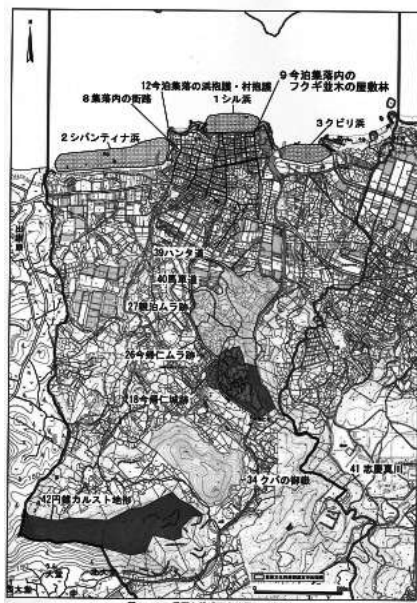


図2 文化的景観における重要な構成要素位置図
『今帰仁村今泊のフクギ屋敷林と集落景観』整備計画書』P.21より抜粋

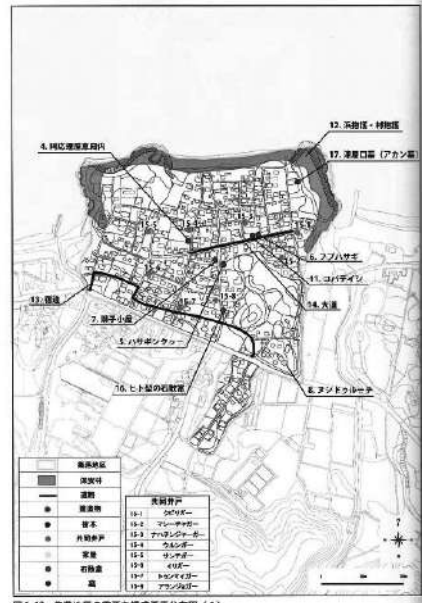


図3 集落地区の重要な構成要素分布図(1)
『今帰仁村今泊のフクギ集落景観 調査報告書・保存計画書』II-16より抜粋



図4 集落地区の重要な構成要素分布図(2)・
街路とフクギ並木

『今帰仁村今泊のフクギ集落景観 調査報告書・保存
計画書』Ⅱ-17より抜粋

(1) 聞き取り調査のねらい

文化的景観の価値や文化財を活かした地域づくりをテーマに各地の調査を進めており、文化財担当の部署だけでなく、村役場内のどのような部署と連携を取りながら「まちづくり」に生かされているのかを中心的に伺った。

なお、2022年の聞き取り調査から2年が経ったため、2024年2月に今帰仁村歴史文化センター館長を再問しその後の状況などを伺った。本報告ではその内容を補足的に追記した。

(2) 各部署の関わり方

・企画財政課の取組み

「事務総合計画」という行政全体の計画の中では、文化的景観地区に選定されているという位置づけはあるものの、村として特別バックアップしているということはない。各字のハサギや元々小道があった古い道とか町並み、フクギ並木に関しては、それらを守りつつバランスをとって観光振興や地域住民の生活を大事にしていくという考え方である。

つい先日住民の方から「フクギを切るなど言われているけれど、道に出てきたフク

ギを何とかしてほしい」と言われる事案があった。もちろんフクギは根っこから抜いてはいけないため、枝打ちなどは地域の作業になる。それに関しては、公民館で話し合いを持っていただき対処してもらった。地域の方もある程度、今ある町並み、フクギ並木というものがずっと守られてきているものだという意識付けはできてきているのではと感じている。

総合計画は第4次計画が終了し、第5次総合計画を策定しているところである。本来昨年度末に終わっているところであったが、新型コロナウイルスの感染拡大により住民意見の聴取が中々進まなく、今年度に繰り越しして年末までに策定している途中である。重要文化的景観地の位置づけについては、何らかの形で盛り込む予定である。

なお、その後2023年3月に「第5次今帰仁村総合計画」が策定された。総合計画の7つの施策の柱のひとつとして「豊かな自然を次世代に引き継ぐことのできるむら【土地利用・自然環境】」に「乙羽岳や美しい海岸線、フクギ屋敷林や松並木など、村を構成する豊かな自然環境の保全を第一に考え、観光政策や村民の利便性の向上に寄与するためのバランスの取れた土地利用を推進する」と位置付けられた。

また、施策大綱4「歴史文化や魅力を未来につなぐことのできるむら」の中でも、世界遺産「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として登録された今帰仁城跡をはじめ、今泊のフクギ屋敷林と集落景観、県指定、村指定の文化財や各集落に遺跡や有形無形の指定されていない文化財の調査・整備・保存・継承・活用等の一貫した整備を促進するとともに、新たな地域文化の創造に結び付けていくように努める必要があるとして、今帰仁村歴史文化センター（写真15）の機能強化が盛り込まれている。

・建設課土木建築係の取組み

「今帰仁村景観計画」を2013年度に策定し、村全体をゾーン別に区分けして景観形成の方針を定めている。景観形成基準（高さ制限、意匠形態、配置など）の順守や事前の届け出を呼びかけている（図5）。今泊地区に

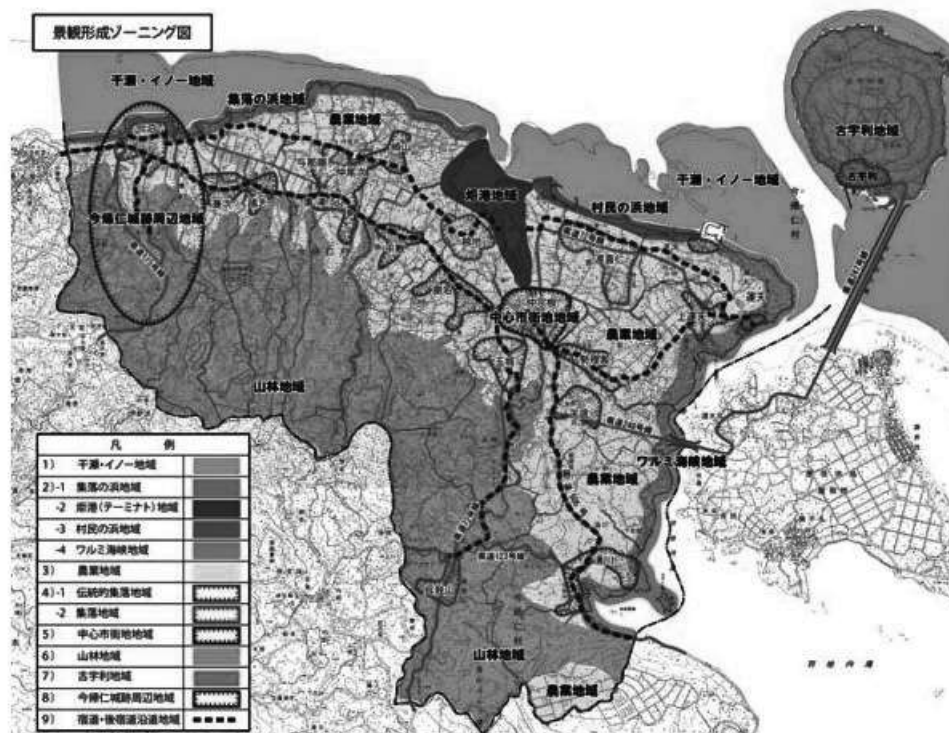


図5 今帰仁村の景観のゾーニング
「今帰仁村景観計画」<概要版> ゾーン別景観形成 p.4より抜粋

関しては景観形成重点地区ということで、今帰仁城跡周辺保全地区、今泊集落地区、今帰仁城跡眺望保全地区が設定されている。この地区に限り建物の高さを8メートル以下にすることになっており、他の市町村と比べて高さを厳しく設定しているところである。基本的にはこの景観計画に則って建物を建てることを促進するとともに、県の事業を活用して今泊の集落内にあるコンクリートブロックに石張りをした景観的な配慮をもたせるような取り組みを進めている。

また、村の単費事業として2019年度に19の字を対象に「景観むらづくり協議会」の設立と運営支援のため、3年間をめぐりに各字に対し年間10万円の補助金を交付する制度を構築したが、補助金を申請したのは崎山地区のみでなかなか活用できていない状況である。補助金の内訳は石張りや木々の伐採、講師料、上限3万円までの機材購入などで、字ごとの協議会が継続してむらづくりに取り

組めるような初期段階の手助けを目的としている。

補助金は3年間で終了するが、補助金交付終了後は協議会で運営費の捻出を議論してもらうことになっている。自主運営としては、例えば景観に特化した写真のパンフレット作成や写真の応募など、綺麗な町並みをみんなに見てもらえるような催しを開いたり、そうした取り組みの中で運営資金をどのように募るかを協議会で話し合いながら進めてもらうことをイメージしていた。景観むらづくりの政策を検討する段階では、フクギ並木の維持管理や瓦屋根への改修などの案もあったが、財政上の問題から断念し最終的に協議会の設立に定まった。

・社会教育課文化財係の取り組み

文化的景観の補助に対する整備計画を作成中で9月までに完成予定である。

なお、『整備計画書』は2023年3月に策

定されたため、その概要は 3. で記述する。

具体的な支援策の主な内容としては、今泊地区のフクギの剪定費用については木を 3 段階にランク分けしたうえで上限 100 万円を全額補助（国 80% 村 20% など）したいと考えている。また植栽についても補助対象とする。ただし補助は予算の限りとなる。100% 補助としたのは、フクギの保存のために負担を強いると誰も手を挙げないと考えられるからである。そうするとみんなが手を挙げることになるため、地域の有識者や学識者の皆さんで一旦決めていただき、それをまた整備委員会で諮った上で予算採りするという流れを考えている。前年までに手を挙げてもらって手順を踏んだ上でみんなで決めるという形にすれば比較的公平になるかと考えている。

・役場内での部署間の連携について

文化財関係の補助事業を執行する際には景観計画ともある程度関わってくるが、課を越えた連携については今後の課題ととらえている。文化的景観の調査報告書に組織の連携についても記載されており、今後は具体的な事業を通じて連携をしていきたい。

建築土木部署と文化財担当とであらかじめ調整した事例としては、仲原馬場のところの柵や道路工事で景観配慮の協議をおこなった。透水性舗装では、昔の白っぽい琉球石灰岩のコーラル色のようなアスファルト工事を実施した。国土交通省の補助メニューもあるが、大規模な工事になるとあまり必然性がなく、実施していない。役場全体としては透水性のアスファルト工事や河川の整備においても石張りのブロック化など景観配慮はおこなっている。

今後も、計画が策定される前に、建築土木部署と文化財担当とで事業内容の調整を進めていきたい。

(3) 今泊地区の文化的景観の保存・活用について

・景観形成基準の順守について

今泊集落地区については高さ規制だけで、屋根の形状についてはできるだけ勾配屋根にすることとしているが、規制は基本的にはお

こなっていない。赤瓦についても補助制度がなく、あくまで推奨、お願い程度である。色についても沖縄県全体の景観基準にしたがって、マンセル値の明度 8 以上、彩度 2 以下という基準を設けている。

今のところ基準を設けたことによって住民側との大きなトラブルは発生していないが、個性を出したい方の場合、アクセントカラーであればマンセル値 10 まで基準を緩めるなど柔軟に対応している。外壁の素材や柄について少し基準をはみ出す部分もあるような場合は、植栽部分を増やしてもらうなどで対応している。

村道の桜並木については「桜祭り」をすることから伐らないようにしており、見通しが悪くなるので「ゆっくり走るように」という注意看板を掲出している。

・今泊の住民の意識

今泊の地域住民の間では観光地にしたいという思いは無く、積極的な PR もしていない。静かに過ごしたいという人が多い。観光化が進んでいる本部町備瀬地区では観光客や外国の人が突然家屋敷に入ってくるなどのトラブルがあると聞いており、そういったことは望んでいない。今泊はいい地区だという気持ちもあるが、積極的な PR はしたくはないと考えている。大手資本によるホテル建設や開発の計画の話は今のところ来ていない。民宿のような小さな宿泊施設は昔からたくさんある。8 メートルの高さ規制があるため大きな計画は入ってこないと考えられるが、条例に罰則などの法的な規制はないため、もしそういった話になれば地元から反対運動が起こるかもしれない。

今泊がほかの地区よりも景観維持や地域の歴史を知ることについて熱心なのは、グスクやフクギへの愛着があり、地域みんなで維持してきた、守ってきたという思いがあるからである。ただし、今帰仁城は抗争に敗れて廃城になったものであるため、グスク時代の血縁・地縁は切れており、つながりとしてそれほど強いものではなく年々薄れてきているように思われる。

フクギの景観は琉球時代からあるが、グスクの管理が首里の役人に移った後、この土

地を売り払おうという話があった時に、当時の今泊の村長がそれを守ったという歴史があり、この場所を守るために戦前から戦後にかけてフクギ並木を守り桜を植えていこうという活動につながってきている。それが今泊の人たちの地域への愛情が深いゆえんである。

沖縄戦においても一部は焼かれたところもあるが、今帰仁村は他の地域と比較して爆撃による被害が少なかったことと、フクギそのものが燃えにくい特質だったため残された。フクギはこのように戦前から戦後へと景観の連続性を保っており、今泊の文化的景観において最も重要な構成要素であり、住民がとても大切にしている文化財である。

・祭祀施設、行事への関わり

重要構成要素になっているハサギなどの宗教施設の補修については、例えば茅葺きの屋根の修復など施工については字ごとに協力してもらい、材料費は村の負担としている。主体は集落であるため、全部を村が負担するというわけではない。今泊地区だけが特別扱いになっているという意識が他の自治区からあるので、全体のバランスを配慮する必要もある。

地域の宗教行事などには村は基本的に関与しない。記録をとったり祭祀や祭祀の歴史を周知するだけである。

ノロの育成については後継者の問題が起こってきているため、見守るという形などで支援をしている。30年ぐらい前まではノロや区長、地域住民などみんなで祭祀をおこなっていたが、現在ではすっかり廃れてしまった。しかし、ノロが残存している状況は沖縄県内でも珍しく、独自の風習が残されていることは貴重である。

毎年4月末から5月になると中南部から観光バスなどを使って団体で今帰仁にウガンにくる。そうした団体の受け入れはなかなか大変でもあるので、ノロとして案内料などはいただいておられると思う。昔のノロは琉球王朝の公務員で給料が支給され位も高かったが、その制度は廃れ廃業となった。しかし、今も地域の繁栄を祈る人たちからは要望されることもあるため、祭祀を続けている。祭祀を要望する人がある限りなくならないと思わ

れる。上の世代の人たちは城下町としての自負があるのか、なんとなく残していかなければという思いがあるが、若い人たちの中では薄れている。

若い世代はノロや祭祀行事に関心がなく、1713年より新しい集落（越地、渡喜仁、呉我山など）ではハサギや豊年祭などの祭祀行事がないため、とくに若い世代を中心に住む場所として好まれる。普段、一般の地域住民が拝所をまわることはほぼない。区長さんと役の人しか行かない。また、年中行事は年々簡素化されていく傾向にある。海辺から砂やサンゴのかけらを持ってきて家の周りに撒くといったことはするが、拝所をまわって線香をあげるということなどはしない。少し上の世代では、6年生ぐらいの子が十三祝いとして御嶽に連れていってもらおうということがあったが、だんだんなくなってきている。

こうした昔からの習俗も文化的景観の一つであるため、維持していくためには何らかの形で残していかなければと考えている。

・地域との関わり

今泊の住民と村役場の各部署が話し合うような場としては、総合計画の策定の際にワークショップを予定していたが、コロナの時期だったため開催できず、代わりにアンケート調査を実施した。

文化財としての文化的景観の価値を理解してもらうためには上からの押し付けになっても住民は付いてこないし、熱い思いの人が出てくるかというところもそういう人もあまりいないので、住民間でのバランスが大事だと思っている。豊年祭は大事だと頑張っている人がいる一方で、隔年にしようという意見も出ている。島の行事のないところに住みたいという若い人も増えているなかで、一方的に進めるのは難しい。景観条例の制定の際にも各字ごとに説明会を開催したが、今泊の人たちは意識が高く多くの人が集まったのに対し、他の字は人がとても少なかった。地域の歴史などについての関心の度合いは字によってかなりの違いがあり、住民に対する意識づけをどのような形で進めていけばいいのか考えさせられた。

景観計画策定前の2011年から2012年

にかけては、住民たちが自ら意識的に継続して景観維持に取り組んでいけるようになることを目標としていた。シンポジウムなども開催したが、行政が定期的に何らかのイベントを実施していくことが大事ではないかと考えている。区長への歴史的・文化的な講習や講座などは有効だと考えている。

景観計画の策定後、一度だけ景観の向上計画を住民たちと作成したが、それが実際に形として現在機能しているかというところではない。条例制定、景観計画策定の際に開催した字ごとの説明会では「村の発展のためのホテル誘致が難しくなる。余計なことをするな」など、特に重点地区に指定される予定の字からネガティブかつ厳しい意見が上がった。補助金の交付額の大小などによって字間の軋轢が生じたり、批判が生じる場合があるためそこをいかにコントロールするかが重要と考えている。

3. 『重要文化的景観 今帰仁村今泊のフクギ屋敷林と集落景観』整備計画書の概要

2023年3月に策定された『重要文化的景観 今帰仁村今泊のフクギ屋敷林と集落景観』整備計画書』について、その概要を記述し、2022年6月時点での聞き取り調査以降に進展した整備施策について書き留める。

この整備計画は、今泊の文化的景観の価値を把握し保存計画の基本方針を示した上で、住民からの要望など課題を整理し、課題に対する整備目標と方針、付帯的な整備の内容を示したものである。

主な内容としては、文化的景観の重要な構成要素ごとに保存活用方針を定め、海岸、集落、農地、グスク周辺、山地といった景観単位ごとに整備内容を定めている。

課題としては、人口減少と少子高齢化の中で空き家や空き地が増加していること、集落を訪れる観光客が増加しつつあり、生活環境とのバランスが問題となりつつあること、フクギ屋敷林の管理の問題、祭祀や年中行事への参加者の減少などが掲げられている。

こうした現状と課題に対応するため、整備の目標として「受け継がれてきた文化を大事に想い 島人（シマンチュ）が守り伝える

今泊（イエードウマイ）」を定めて、1. 地域が守り育てる今泊の抱護、2. 祭祀・年中行事を大事に想う心を養い継承する、3. 地域の生活を保ちつつ観光活用する、4. 重要な構成要素（建造物等）の修理等、5. 文化的景観を学び伝える、という5つの整備基本方針を立てた。

「1. 地域が守り育てる今泊の抱護」では、集落内のフクギ屋敷林や浜抱護、村抱護の形状寸法や維持管理の状況、危険木や支障木の状況を調査し、台帳を作成して大学等研究機関や樹木医と連携して管理に生かすこととしており、すでに調査は進んでいる。また、住民がフクギの抱護が持つ歴史的意義や特性、機能などを熟知し、日常的に整備や管理ができるよう「フクギによる抱護の手引き」を作成し配布している。

「2. 祭祀・年中行事を大事に想う心を養い継承する」では、祭祀や年中行事について広報誌などにより定期的に情報発信するとともに、学校教育との連携を図り地域学習やクラブ活動で学べる機会を設けることとしており、すでに実施されている。

「3. 地域の生活を保ちつつ観光活用する」では、今帰仁村歴史文化センター内に文化的景観をガイダンスするコーナーを設け、クバの御嶽から海までの広範囲にわたる文化的景観全域を解説できる展示をおこなうとともに、文化的景観を紹介する観光ルートの設定も進められることになっている。その際には、集落内の住民の生活に影響を与えないように、集落外に駐車場を設け、ボランティアガイドが徒歩で案内できるよう、ガイドの養成もおこなうこととされている。

「4. 重要な構成要素（建造物等）の修理等」では、構成要素の老朽化等の調査をおこない、修理・修景の必要性を評価し、優先順位を検討することとされている。

「5. 文化的景観を学び伝える」では、文化的景観に関する情報の周知の他に、ワークショップを定期的実施することやデジタルアーカイブコンテンツの作成により、外部への発信を強化することも進められることとなっている。

以上のような整備計画を具体的に推進していくための実施体制としては、図6のよう

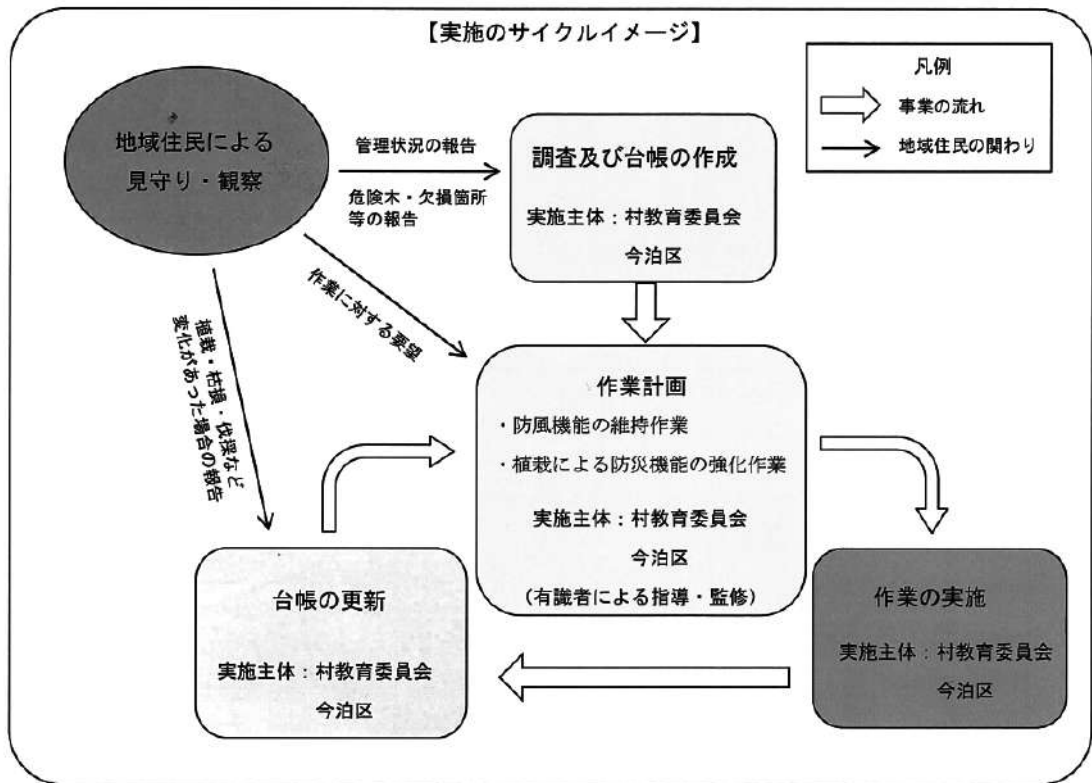


図6 フクギ整備の実施サイクル

『重要文化的景観 今帰仁村今泊のフクギ屋敷林と集落景観』整備計画書』p.53より抜粋

な実施サイクルがイメージされている。「地域住民による見守り・観察」を主体として、村の教育委員会、今泊区がそれぞれの作業を担い、必要に応じて有識者による指導・監修がおこなわれるという流れになっており、整備計画を推進する体制が明示されている。

また、実際に事業を進める住民グループとして、景観やまちづくりに関心の高い住民グループ「フパルシ会」が立ち上げられた。「フパルシ」とは今泊公民館前のコバテイシ（写真1）のことであるという。この会は、集落の課題や目標像、計画内容について意見交換をしながら意識の醸成を図ってきたという。今後は「フパルシ会」を母体として「まちづくりグループ」を立ち上げ、事業を推進していくとのことである。今回の調査ではお話を伺うことができなかったが、今後の活躍を期待したい。

4. 小括

重要文化的景観である「今帰仁村今泊のフクギ屋敷林と集落景観」の現地調査から、今泊地区にはグスク時代の歴史と文化が有形・無形の様々な価値として住民に受け継がれていることがわかった。生業や生活スタイルの変化を受けつつも、ハサギやフクギ並木、屈曲した道などの独特の風水地理を保ちながら今日の暮らしが営まれている。古来の祭祀や年中行事は年々おこなわれなくなってきているものの、世代の上の人たちには今日においても大切な習俗として認識されている。今帰仁村内の各字の中でも今泊地区の住民の文化意識が高いとされており、今後の文化的景観の保存と活用を進める上で有力な担い手になっていくものと期待される。

文化的景観の「整備計画書」も策定され、

今後は具体的な実施に向けて住民主体でどのように進めていくかが重要になってくる。

そのためには、第一に村役場内の部署間で文化的景観に対する情報を共有し、各種の施策の遂行や事業実施において連携を図ることが重要である。第5次総合計画において、今泊地区の文化的景観の保存と活用のあり方が明確に位置づけられたことを受け、今後は部署間の連携についても個々の職員が認識を深めることが求められよう。

次に、住民の意見をまちづくり施策に反映させる仕組みづくりと実際の行動や参加の機会をどう作るかである。これまでは住民の自主性だけに任せていても動かないというのが現実問題としてあった中で、「フパルシ会」が立ち上がったとのことで今後の活動が期待される。

聞き取り調査の中では他の地区との公平性や若い人たちの意識の変化が課題として強調されていたが、今泊地区には世界遺産と重要文化的景観が共存するという今帰仁村のシンボリックな価値が公的に認められており、その歴史的・文化的価値を村民全体で認識してもらおうシンポジウムや歴史講座などの学

習の場をより多く設けていくことが大事であろう。

また、「今帰仁グスクを学ぶ会」のガイド養成では、他の地区の住民も積極的に参加してもらえるよう呼びかけをしていくことが求められる。

他の地区との連携については、すでに景観計画において地区の特徴を生かしたゾーン分けがなされており（図5）、今後はさらに景観計画と文化的景観の整備計画の整合性を図り、今泊地区の特色を今帰仁村全体に生かせるように関連付ける一方で、それぞれの地区ゾーンごとの特色を生かした地域づくりが進められ、有機的につながりながら村全体での地域づくりへと展開していくことが期待される。

<集落内写真>



写真1 天然記念物 今泊のコバテイシ



写真2 石張りのブロック塀と白い透水性舗装
景観修景の例



写真3 フクギ並木のチヌグ
竹の柵で修景された例



写真4 旧親泊村のフクハサギ
重要構成要素



写真5 旧今泊村のハサギンクワー
重要構成要素



写真6 フクギ並木
NHKの朝ドラ「ちむどん」のオープニングに
出てくる所



写真7 フクギ並木
海につながる曲がった道



写真8 シル浜
重要構成要素。イノーが広がる海辺。砂浜の黒い帯は
小笠原諸島の海底火山の噴火による軽石



写真9 波の浸食によって海中に立つノッチ



写真10 瓦屋根の民家とフクギ



写真11 共同井戸
重要構成要素



写真12 電柱に覆いかぶさるフクギ



写真 13 人型の石敢當
重要構成要素



写真 14 集落の環境の気が逃げないように海岸
近くに植えられているフクギと曲がった道



写真 15 今帰仁村歴史文化センター



写真 16 今帰仁今泊地区アーカイブツーツリズム
“スマホ片手に時空の旅に出よう”のQRコード

<今帰仁城跡写真>世界遺産琉球王国のグスク及び関連遺産群



写真 17 今帰仁城跡前の石碑
世界遺産の構成要素であることを表示している



写真 18 今帰仁城入口からの全景



写真 19 今帰仁ノロ殿内火の神の祠



写真 20 クバの御嶽



写真 21 ソイツギ
城内下の御嶽



写真 22 グスクから見える海辺の景観



写真 23 今帰仁里主所火の神
(なきじんさとむしどころひぬかん)



写真 24 志慶真門郭(しけまじょうかく)
王の側近の住居か。明朝時代の陶器の破片も出土。

II. 今帰仁村今泊地区でのワークショップ

日時：2023年6月22日（木）
現地視察：今泊地区・今帰仁城跡：15時～17時30分
講演：18時～19時、ワークショップ19時～20時
場所：地域活動活性化拠点施設（今泊区）
調査者：上杉和央（京都府立大学文学部准教授）、奥谷三穂（同歴史学科共同研究員）、松岡茉陽琉（京都府立大学大学院文学研究科博士前期課程1回生）、岩本悠梨（京都府立大学文学部4回生）

1. ワークショップ報告

・奥谷グループ

参加者7名：今帰仁村今泊地区2名、今帰仁村仲宗根地区1名、今帰仁村平敷地区1名、名護市から参加1名、南風原町から参加2名

※発言者の表記方法：今帰仁村今泊地区住民（今泊1.2）、仲宗根地区住民（仲宗根）、平敷地区住民（平敷）、名護市住民（名護）、南風原町住民（南風原1.2）

（奥谷）どこから来たか、どんな目的で、今泊はどんなところかなど。

今泊1：今泊には結婚してからずっといる。地区内放送があって何かなと思い友達を誘ってきた。今泊は静かで良いところだが近頃空き家が増えてきて民宿も人がいなくなってきた。どうしたらいいだろうかと思ってこの会に来た。

今泊2：今泊1と一緒に6人くらいのボランティアで掃除をしている。実は落ちて腐ると臭く、アリとギンバエが寄ってくる。道路のゴミ拾いや花を植えたりしている。木曜日や土曜日の朝8時半ごろから仕事に行く前におこなっている。しかし限られた時間と人では十分にできない。

那覇から来られた40～50代の方がバス停に着かれて深呼吸されていた。

ぼーっと浜を眺めていたくなる。ここは空気が違うとおっしゃって、国頭や大宜味よりこの風に呼ばれるとおっしゃっていた。内地から来た方も本当のただの空気というのを感じるとおっしゃっていた。フクギの木のトンネルの向こうに海があり「ちむどんどん」のロケをしたところとお伝えすると感激されていた。

仲宗根：仲宗根には30年くらい住んでいて、地元のことをあまり知らないので広報を見て参加した。家の周りにはフクギはないが、海側に面していて風よけとしてモクマオウやアダンが生えている。フクギについてはあまり気にしたことはない。

平敷：平敷地区から来た。車で8分ほどのところ。広報を見て来た。名護出身で結婚してこちらに来たが地元のことをあまり知らない。そろそろ知らないといけないと思ってきた。今泊は好きなところで時々散歩に来るが集落に入るとよく道に迷う。

名護：名護市屋我から今泊の友達に誘われて来た。フクギについてはあまり知らないが新聞を見て興味があったので参加した。

南風原1：妻：南風原町から琉球新報の記事を見て夫と一緒に来た。南風原はビルの林なので、今泊は自然が豊かで海も山もあり空気がきれいだなと思う。

南風原2：40～50年前から7年に一度「今帰仁マーイ（廻り）」として門中でバスを出して今帰仁城のウガンに来ていた。コロナで3年ほど来られなかった。これまでは今泊の集落の中に入ったことはなかったがとてもいいところ。ウガンではバス停の横の拝所（ヌルドゥンチ）、次にエーガー、グスクのウタキを回っている。

（奥谷）課題と感じていること、これからどうしたいか？

今泊2：おじの介護で10年近く那覇から通っていた。通っている中で思ったのは介護が必要な方は屋敷周りのフクギが

掃除できない。一人暮らしの方や空き家の周りを隣近所が声を掛け合いながら掃除ができればいいと思う。

フクギが茂るとコウモリも来る。大きくなりすぎているので伐採したいと思うが、そこがウェディングフォトのスポットになっていて、写真屋さんが切らないでほしいと言う。

フクギの維持管理方法がよくわからない。苔が生えてきたのでどうすればいいかわからず、那覇の緑化センターに聞いて苔取り作業をした。

フクギの実がたくさん落ちるのでゴミとして処分しているがもったいないと思っている。紅型の黄色はフクギの皮で染めているので、例えばフクギの実で布を染めたりポットに実を植えて苗を育てたりして販売もできたらどうかと思う。そうすれば「子ども食堂」などの資金作りにもなるのではないか。そういった作業ならお年寄りにもやってもらえる。

フクギ並木のトタンの代わりに竹で「チヌグ」を作ってはどうか。今設置されているのは宮崎から持ってきたものとのことだが、国頭村には竹もあるし作れる人もいるので、ワークショップでみんなで作ったらいい。

フクギ染めは「3時のおやつ」というカフェの方（砂川真理氏）がされているので、誰か先導する人が呼び掛けて民宿の人たちや浜の人たちも一緒にやりましょうとなればいいと思う。

今はカフェやショップ、シマの人たちとの連携が取れていない。お店を営んでおられる方とシマの人を行政が呼び掛けて一緒にやれるようになればいい。元々ここにおられるシマンチュと他所から来た私たちとは連携ができていない。

全体としてフクギの管理と活用については、情報共有ができていない。

南風原 2：要望であるが、本部の備瀬地区では水牛観光をしている。こちらでもしたらいいと思う。

今泊 2・南風原 2：備瀬の人が言っていた

のには、観光客がバスでたくさん来て写真を撮るので洗濯物も干せない。備瀬の人たちは空き家も道もきれいに掃除されている。たくさんの方が押し寄せさせるのは困るけど、制限して観光化したらいいと思う。今帰仁城は世界遺産なのでそのこともPRすればいい。

名護：フクギ染は黄色のきれいな色に染まるので、公民館でワークショップをやったらいい。あちらのグループの方が移住してこられた方でいろいろとされている。

フクギの葉は腐葉土になる。

今泊 1：豊年祭は以前は3日間やっていたが、若い人が少なくなって棒おどりをする人がいない。今年は短縮してやるようだ。ハサギはカミンチュが来られてウガンする。今泊の人たちも以前は拝所回りをしていたが、今は公民館の人が代表して回っている。年に2回、グスクの交流センターの前で区長さんがお祈りしている。

・上杉グループ

参加者 9名：今帰仁城を学ぶ会 3名（今泊移住者含む）、観光協会 3名（今泊出身者含む）、今泊移住者 1名（1年ほど前より）、沖縄市より 2名

※発言者の表記方法：今帰仁城を学ぶ会：（ガイド 1.2.3）、今帰仁村観光協会：（協会 1.2.3）、今泊移住者：（移住）、沖縄市：（沖縄 1.2）

（上杉）話を聞いて感じたことは？

移住 1：今泊に来て1年ほど。来てすぐのころ、フクギをどう管理していいかわからず、強剪定した。きちんと聞けばよかった。

ガイド 1：私も移住者。移住したころはとくに何も教えてくれなかった。

協会 2：今泊に住んでいた頃は、フクギの管理について、何も聞かされておらず、価値などもわかっていなかった。

協会 1：「当たり前の風景」「普通の景色」は、良さに気づかない。無関心を関心事に変えることが大事。

ガイド1：外からの目は大事。
協会2：子どものときに聞きたかった。伝える機会を増やしてほしい。
協会1：子どもに伝える取り組みが必要。
沖縄1：今の小学校では3年生時に総合的な学習で郷土を学ぶ。

(上杉) 子どもたちへの学びに比べて、おとな(私たち)の郷土理解は？
協会2：十分ではない。
沖縄2：以前今帰仁城を学ぶ会のガイドに5回ほど参加。毎回、今泊の方(違う方)が掃除をされているのに驚いた。そうした良さを「外の意見」として伝える必要。
ガイド1・2：当たり前風景は「別に…」となる。
上杉：「別に…」という無関心を関心事、自分事に帰す必要があるということが大事。
沖縄2：今泊の良さをまねて、地元の人向けのまち歩きをし始めた。
協会1：今帰仁側として、どう「見せる／魅せる」のかが大事。
協会3：ウェルネスプログラム体験会を村民向けに開催する予定。
協会1：コロナ以前、村民どうしの宿泊体験(民泊的)をしたこともある。自分の村の良さを知る良い機会だった。

(上杉) 見せ方はどうか？
ガイド3：地元の人が「誇り」を持たなければいけない。以前、ガイドの会でチニブをつくった。トタン張りできれいではなかったため。費用はガイドの会で持ち、竹を購入して旧公民館2階でつくった。チニブを張った家の家主には「誓約書」に署名してもらい、補修等は自費で、とした。チニブの運動がその後広がることを期待したが、うまくいかなかった。
現在、ガイドの会の有料ガイドでは、1人1000円として3人以上としている。ガイド役の者に2500円渡す。
移住：近所の人がフクギをすべて伐根した。
ガイド1：価値の共有が大事。

ガイド3：フクギが成長するのは時間がかかる。若木園をつくって補充できる体制にしておく必要がある。
上杉：地域住民と地域外の人びととの関係も大事。

・岩本グループ
参加者6名：今帰仁城を学ぶ会4名(1名、今帰仁村住民だが城より山側に住んでいる)、今泊住民2名
※発言者の表記方法：今帰仁城を学ぶ会(ガイド1.2)(ガイド1が上記の今帰仁村住民、ガイド2はチニブの作成者)、今泊住民(住民1.2)

(岩本) フクギに対する思いは？
住民1：大切なもの。親しんだ景色。でも、フクギの木を近くの住民が切ってしまった。剪定ではなく、バッサリ、衝撃的だった。
ガイド1：住民が大切にしようと思っていない、意識が薄いのではないか。
ガイド2：チニブを作って設置したが、みんながそれに倣わない、いいね、と言ってくれるが、続かない。こうしたらいいじゃないかと動き出すムーブメントを起こす誰かが必要。しかし、住民にはいない。みんなで動き出さないとダメ。
住民1：今泊住民が集まってもフクギの話にはならず、決まった議題のみ(例えば豊年祭とか)を話して終わる。
ガイド2：補助金や制度をみんな知らない。
ガイド3：啓蒙が必要。

(岩本) 対象は住民か若年層もか？
ガイド3：子どもたちに実際に歩いてもらいたい。
ガイド1：高齢者にも参加してほしい。住民は高齢者が多くて、台風で倒れなければいいや、としか思っていないのではないか。今回のこの会も住民が少ない。
住民1：切ってしまったら楽、それでも残すことの大切さを広めるべき。広報をこまめに出すといった草の根活動が必

要。

ガイド4：豊年祭の時に人が集まるので、
そういう場で1コーナーを作って伝えるのは有効ではないか。

ガイド1：説明するほどこの集落の良さを感じる。住民にもしてほしい。イベント参加で若い人を呼びたい。歩いてほしい。

住民1：車では来ないで歩いてほしい。備瀬のようになるのは寂しい。

ガイド1：子どもたちと、付き添いで来る親世代を対象とした活動ができないか。

ガイド2：フクギを切った人も大層悩んだか、人に相談せずに切ったかは知らないが、そういう人を助けられる受け皿が必要。切りたいけど、どこに相談したらいいのか、もっとわかりやすく明記すべき。行政がフクギの手入れ方法の広報をやっても知らない。もっとまめに配る必要がある。

・松岡グループ

参加者5名：今帰仁城を学ぶ会1名（今泊移住者）、今帰仁村住民4名（うち移住者3名）

※参加者の表記方法：今帰仁城を学ぶ会（ガイド）、今帰仁村住民（村民）、今帰仁村移住者（移住1.2.3）

（松岡）フクギに対してどういう印象があるか？

移住1：防風、防砂の役目を果たして観光資源にもなるもの。

移住2：このあたりで宿泊業をやっているが、フクギ目当ての観光客は多い。

村民：台風に強い。観光資源というのもその通りだが、観光客に家の敷地をのぞきこまれるのは勘弁してほしい。

移住2：普段の景色に当たり前にあるもの。守っていききたいとは思いますが、備瀬みたいなフクギファーストはちょっと。

移住1：備瀬は枝切もできない。反対にフクギをきれいに整えすぎると違う気がする。

（松岡）今泊を歩いたときフクギが生えて

いないところをトタンで覆っているのが気になったが、見た目や風通しはどうか。

村民：トタンももう馴染みのあるもの、生活の一部だから気にならない。

移住1：フクギ自体風通しが悪い。

移住3：あとフクギの落ち葉を掃除するのが大変だからあんまり本数が多いのもつらいところがある。

（松岡）フクギはいいことばかりというわけではないのか。

移住2：手入れは大変だけど守っていききたいというのはみんなの共通認識だと思う。

村民：ずっと身近にあったからこれからもあり続けてほしいと思う。ただ、いいものなんだ、という思いは外からの刺激によるのが大きいかもしれない。

ガイド：ガイドは地元の人が少ない。フクギだけでなく、今泊全体の良さを守っていくにはもう少し地元の人に頑張ってもらいたい。

（松岡）フクギのある景観を守っていくためにはどうしたらいいと思うか。

移住2：補助金制度の周知をする。たぶんみんな知らないと思う。

移住3：効率のいいフクギの剪定を教えてください。どのくらいのペースでどのくらい枝切りするのか、一番かかる労力が少ない方法が知りたい。

村民：フクギ台帳はいい案かもしれない。

移住1：とにかくマニュアル化してほしい。

移住2：業者も指定してほしい。すべて従う。自分たちで考えるのは大変。

移住1：その際、だれのため、なんのためにやるのか、ということは意識してほしいし、その意識を明示してほしい。

（松岡）フクギ以外の今泊の魅力についてはどうか。

ガイド：上杉先生の話にもあった年中行事も魅力だと思う。

移住2：ただ、以前ほどの気持ちはない。次世代を担う若い人たちに興味をもって

もらう必要がある。

移住3：小学校の授業の一環とかでやってもらえないか。おじい、おばあも子どもには優しいからいろいろと教えてくれそう。

移住1：今泊の祭祀は歴史があるが歴史があるからこそのしがある。20年に1回のペースでまわってくるかこないかの祭祀担当は名誉職みたいな扱いを受けていて1週間ほど仕事を休んで作業にあたる。しかし今の人たちにそれを求めるのは難しいと思う。

村民：自分の集落は戦後できた新しいところなので、比較的柔軟な運営ができていると思う。今泊はたしかに大変そうだ。

移住2：形だけ受け継ぐのもありだと思う。ただ、外せない演目などやっぱり一度きちんとそれぞれのお祭りについて調べる必要があると思う。

移住3：とにかく年中行事の継続にはキーパーソンが必要。上の世代を納得させて、同世代、下の世代をまとめあげるのはなかなか大変。そういう人材じゃないと無理。

2. 小括

(1) 参加者について

あらかじめワークショップについて周知された今帰仁城を学ぶ会のガイドや今帰仁村観光協会の職員の他、一般住民や他地域からの参加者は広報や新聞を見て来た人がほとんどであった。

今帰仁村の参加者は、もともとの住民の他移住者も参加しており、日頃からフクギの掃除をボランティアでおこなっている人もいた。他所からの参加者には今泊の景観と空気の良いさに惹かれてきた人などが参加していた。

(2) 課題

フクギの葉や実の処分に困っており、フクギの管理方法や補助金制度について情報発信と共有がされていない。

今帰仁村の中での事業者や住民、ナイチャーと移住者との連携が取れていない。

高齢者や子どもたちも一緒に参加できる仕組みがない。

豊年祭に参加する若者が減ってきている。伝統行事やウガンについて住民がもっと知り、今後どう受け継いでいくかを考える必要がある。

(3) 今後のあり方についての意見

フクギを守っていききたいと思うのはみんなの共通認識としてある。

一人暮らしや空き家の周りを隣近所が声を掛け合いながら掃除ができればいい。

フクギの皮を使ったフクギ染めは紅型の染色に使われるなど伝統的に利用されているが、フクギの実も染めに使えるので公民館などでワークショップをしてはどうか。

「チヌグ」を国頭の竹を使って自分たちで作って設置してはどうか。公民館でワークショップをしてほしい。

備瀬の水牛のように観光化を進めてはどうか。日常生活のエリアに観光客が入ってくることについては入場制限をしたり、車では来ないように周知してはどうか。

行政が住民、事業者、移住者等が連携できる仕組みを作ってほしい。

Ⅲ．一般社団法人今帰仁村観光協会の聞き取り調査と中央公民館の現地調査

今帰仁村今泊のフクギ屋敷林と集落景観の調査の一環として、2023年6月23日(金)に一般社団法人今帰仁村観光協会への聞き取り調査と当協会の事務所の敷地内にある今帰仁村中央公民館の保存活用の状況について一級建築士事務所あまはじの藤野敬史氏の案内により現地調査をおこなった(写真25)。

調査の目的としては、観光協会は今帰仁村の観光戦略の中で今泊のフクギ屋敷林の保存と活用のあり方についてどのように捉えているのかを聞き取り調査すること、次に、今帰仁村の近代的な景観のひとつである「今帰仁村中央公民館」の保存と活用の状況から村民の文化やコミュニティに対する意識を知ること、さらにはフクギ屋敷林とともにある瀬底島の集落景観を調査し今泊との比較をおこなうことの3点である。

なお、3つ目の瀬底島については大雨に見舞われ、十分な調査にはならなかったため、2024年2月26日～27日に再度訪問し、調査を実施した。これについては、別稿にまとめる。

1. 一般社団法人今帰仁村観光協会への聞き取り調査

日時：2023年6月23日(金) 10時～11時30分

場所：一般社団法人今帰仁村観光協会
今帰仁村字仲宗根 230-2

インフォーマント：事務局長・横澤一美氏、
職員・金城卓美氏

調査・報告者：奥谷三穂(京都府立大学
文学部歴史学科共同研究員)

(1) 観光協会と教育民泊について

観光協会は2015年に設立されたが、現在、当時の人はだれも残っていない。職員はみんな若い。観光協会は一般社団法人であり、行政の下請けや補助金漬けで運営するのではなく、民間事業者主体で運営することを大事にしている。行政との関わりでは補助金に関して監査を受けることと交付金事業の実施にお

いて連携している。理事や会員は村内で事業をしている方たちが主であり、目指しているのは「地域商社」的な存在である。私(横澤氏)は2020年の10月から着任した。それまではずっと東京でIT関係の仕事をしてきた。東京にいた頃からよく戻ってきていたので地元のことは間接的に理解していた。退職して戻ってきてこの仕事にやりがいを見出している。

今帰仁村内で民泊はおよそ45軒が稼働している。観光協会として毎年、地域の歴史や今帰仁城の研修会も行っている。各民泊が案内人となって対応できるように勉強してもらっている。消防と衛生など簡易宿泊所としての許可も受けており、救急やアレルギー対応なども研修の対象である。

「教育民泊」は元々地元の人たちの中から始まったものである。沖縄北部での教育民泊の始まりは伊江島からと聞いている。それは戦争とは関係のないところから始まった。国の地域活性化政策としてグリーンツーリズムの「農泊」からスタートし全国へ広まったものである。

観光エージェントとしては、なぜ修学旅行先として沖縄を選ぶかという、戦争遺構と沖縄文化、そして本土にはないきれいな海の3つが魅力であることが言える。しかし、教育民泊に対して戦争体験の話や遺構見学は特に求められていない。民泊は、宿泊しながら沖縄の歴史文化を体験できるからということで、特に沖縄は3つの要素がマッチしているから選ばれている。戦争体験の話や遺構見学は沖縄本島の南部の方でエージェントが別途組み込んでおり、今帰仁村では特別に組み込んでいない。民泊で戦争の話をするかどうかについても各民宿の判断に任せている。

戦争については沖縄だけでなく広島や長崎もあるので、沖縄でなければならないということではない。ただ沖縄には本土にはない独特の文化があるので、文化継承については民泊によって家族的な体験を通して地域の良いものや課題を見聞きし、何らかの気づきを得ていくという格好の学びの場となっている。

教育民泊は子どもを対象としている。大人を受け入れるかどうかは各民家の判断である。現時点において、今帰仁村観光協会では大人民泊の取組みは本格的におこなっていない。



写真 25 今帰仁村観光協会事務所前にて
手のしぐさは今帰仁村のマークを表す。左から金城氏、奥谷、横澤氏

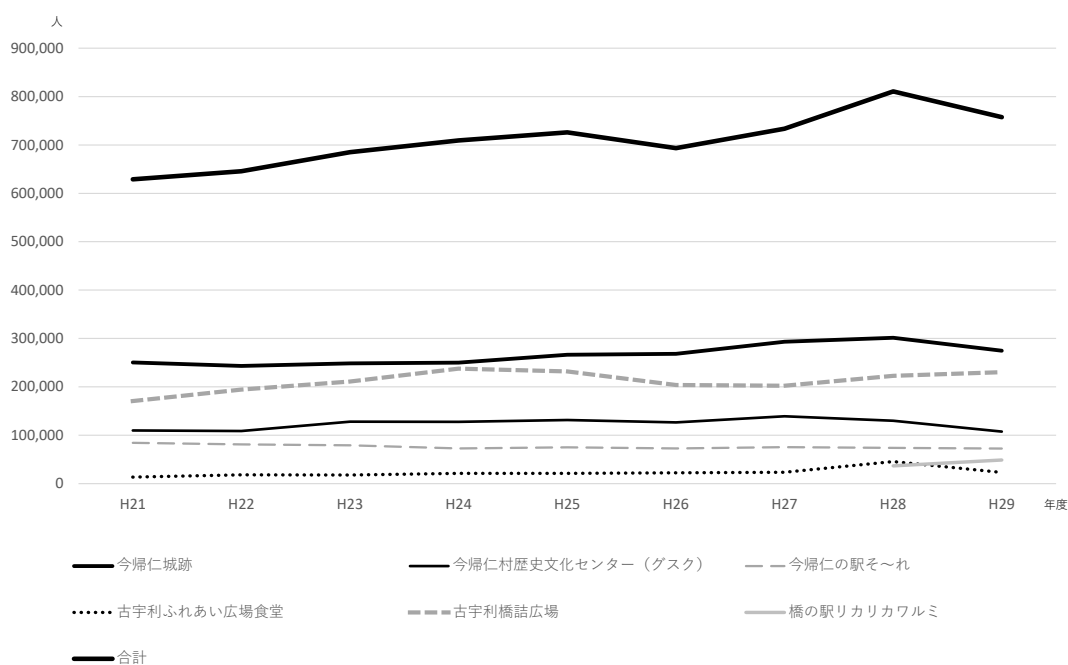


図7 今帰仁村内施設入場者数（H21～H29年度）
『第3次今帰仁村観光リゾート振興計画』（平成31年3月、今帰仁村役場）より作成

(2) 観光入り込み客数について

観光入り込み客数としては2018年度にまとめられた特定の施設のレジ通過人数のものがある(図7)。図のとおり村内施設入場者数で見ると、一番多いのが今帰仁城で次に古宇利橋詰広場である。2015年度から急激に増加しているのは、2014年にJALのCMに若者に人気のグループ嵐が出演し「古宇利島のノッチがハートに見える」というフレーズで放映されたことで、一時は村内入場者数が100万人になったこともある。

村のイベントとしては、「今帰仁グスク桜まつり」(9日間)、「古宇利島マジックアワーRUNin今帰仁村」¹、「いいな三村運天港いちゃり場まつり」¹、「今帰仁まつり(今帰仁村総合まつり8/1開催予定)」¹、「今帰仁ハーリー大会」¹、「現代版組踊 北山の風」などがある。

「今帰仁グスク桜まつり」は観光協会が事務局として実施している。コロナ前の2020年は1月に9日間開催で3万人だった。コロナ後の今年度は2万8千人だったが小学生はカウントしていないので去年より増えていると思われる。

(3) 今泊のフクギについて

フクギ並木の清掃などをボランティアでされているが、それはそれでとても素晴らしいことである。しかしボランティアでは続かない。あくまで個人のベースにあるものとしてとらえ、それは生かしながら、いいものはきちんと経済的に回していけるような連携の仕組みを作っていきたい。そうでないと長続きしないと考える。

フクギの活用については、今泊集落の散策とフクギ染めや土染めなども技術を持っている人とタグを組みながらやっていきたい。チヌグ(竹の柵)もいいと思うが、トタンをやめてチヌグにしなければならないということではないと思う。しかし連携しながら景観もよくしていければと思う。その際に大事なものはそのおうちの方がどう思っておられるかということだ。

1 伊平屋村、伊是名村、今帰仁村の三村で運天港からフェリーが出ている三つの島のイベントで「いちゃりば」は出会う場という意味。各村の泡盛を持ち寄ってひとつの甕に混ぜ入れて飲む。

案内していてフクギの間からおうちの中が見えるようなところもあり、プライバシーへの配慮から「ここはさっと通り抜けましょーうね」などと声掛けしながら通り過ぎるようにしている。

(4) 今後の展望

今後の展望としては、定款に「世界の人に好きになってもらう」と書いているように、外部の人たちにもっと今帰仁村を好きになってほしいと思っている。今帰仁村はいいところであるが、オーバーツーリズムにならないように、またハードウェアに依らないで、フクギやグスクなど今ある歴史や文化の資源を生かしていかに今帰仁を好きになってもらえるか、何回も来てもらえるか、最後には移住してもらえんことを目指して、そのためいかに今帰仁村とのかかわりを持ってもらえるかを考えていきたい。現在は美ら海水族館や古宇利島へのついでに立ち寄るような素通り地区にしかなっていない。

私たちが目指す「地域商社」は、ただ「今帰仁村はいいところ」とアピールするだけでなく経済が回せるものにしていきたい。会員の皆さんは事業者の方ばかりなので、いかに経済が回るかを常に考えていきたい。

新しいプログラムとして、これまでは民泊を生かして子どもたちにも関係性をもってほしいということをやってきた。今後はさらに大人をターゲットに、主に県外の企業向けのプログラムとして「ウェルネスプログラム」を開発している。従業員の研修・福利厚生の場所として心身ともにウェルネスになってほしいと思っている。そこでまず、このプログラムを村内の皆さんに知ってもらうために「ウェルネスプログラム体験会」を7月8日に開催する予定である。

こうした新しいプログラムを村民の連携で進めるためにも、地域ガイドやウェルネストレーナーの育成に力を入れている。

(5) 小括

今帰仁村観光協会においては、重要文化的景観である今泊集落のフクギ並木のみを強

2 「ハンタ道セラピー」、「ビーチクリーン&ビーチセラピー」、村内在住者対象、参加無料。

調して観光政策をおこなっているのではなく、世界遺産である今帰仁城跡や古宇利島を中心に、素通りする地域ではなく今帰仁村を目指して来訪し、滞在やリピートによってグスクから海岸沿いまで、より広く深く今帰仁村の魅力を知ってもらうことを目指している。

観光の実績としては、2013年から始まった修学旅行向けの「教育民泊」が特徴的であり、沖縄の文化体験、今帰仁城跡の歴史、海辺の体験の3つの要素を組み入れたプログラムがきめ細かに組まれており、学校側の希望に応じて対応している。また受け入れのための研修も毎年実施され、ブラッシュアップが図られている。今泊集落の散策については、体験プログラムのひとつとして取り入れるかどうかは民泊側に委ねられている。戦争体験についても同様である。

今後は大人向けの体験プログラムとして、企業の従業員を対象として心と体のウェルネスプログラムにも力を入れていくこととしており、グスクの森から海岸までの雄大な自然の中で、様々な場所を活用したプログラムが用意されている。提案の中には今泊集落のガイドやフクギ染めなども取り入れられている。

今泊集落のフクギの活用については、フクギ染めやフクギの実の活用、チヌグ作りといった様々なアイデアが出されており、事業者や移住者、地区住民、ボランティアなど多様な関係者との連携を図りながら経済的にも回る仕組みの構築が求められている。

2. 今帰仁村中央公民館の保存と活用

(1) 今帰仁村中央公民館の概要

今帰仁村中央公民館は今帰仁村役場の交差点を挟んだ向かい側にあるコミュニティセンターに隣接して建てられている。一級建築士事務所あまはじの藤野氏に案内をしていただきながら建物の保存と活用について説明を聞いた。

中央公民館は写真26・27のように沖縄の伝統建築に用いられる赤い列柱276本が連続する公民館とは思えないような斬新な回廊のデザインが特徴的である。276本の柱にしたのは、村の中央にそびえ村民のシンボルである乙羽岳（写真28）の標高275.4メ



写真 26 今帰仁村中央公民館御嶽



写真 27 赤い列柱の回廊



写真 28 今帰仁村民のこころのふるさと乙羽岳

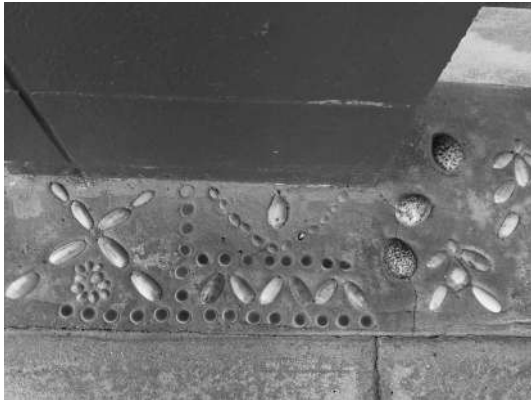


写真 29 建設時に住民たちが参加して
貼り付けた貝殻



写真 30 2023年6月23日に開催された
「なきじん夜市」の様子
(藤野氏提供)



写真 31 「なきじん夜市」の風鈴
(横澤事務局長提供)

ートルにちなんで設計されたという。コの字型に区切られたいくつかの部屋の上をひとつの大屋根が覆い、部屋と列柱の間には「あまはじ（雨端）」といわれる沖縄の民家によく見られる軒下の空間が生まれている。内でもなく外でもない自然とつながる空間をすることで、まぶしい光を遮り風通しの良い心地よい半屋外の場となっている。

この建物は1971年に象設計集団が設計・建築をおこない、1975年に開館した。当時の建築界の中心であったインターナショナルスタイルの近代建築に抗して、地域主義の建築として作り出したものであるという。1977年芸術選奨文部大臣新人賞（美術部門）を受賞し、2015年度「日本におけるモダン・ムーブメントの建築197」にも選定されている。沖縄で訪れたい建築物のひとつに数えられ、日本全国、海外からも多くの建築家や観光客が見学に訪れてきた。村民にとっても1972年の本土復帰後のコミュニティの中心として様々な活動の場となってきた。

(2) 建物の損傷と保存のあり方

しかしながら、当時の沖縄では1975年に沖縄国際海洋博覧会が開催され、大量のコンクリートが必要となったため、この建物にも塩分を含んだコンクリートが使用され50年たった今、塩害による鉄骨の錆と爆裂が目立つようになってきた。放置すれば50年しか持たないと言われ、補修に費用もかかることから村役場からは一時は取り壊しの案も出されたという。

そうした中で、3年前から公益社団法人沖縄建築士会を中心に保存に向けた勉強会やシンポジウムが開催され、参加した地域住民からも保存に向けた意見や活用のアイデアが出された。これには村役場の比嘉克雄副村長の理解によるところも大きかった。比嘉副村長によれば、建築当時「自力建設」という理念に基づいて、住民も参加したワークショップ形式で建設がすすめられたという。赤い列柱の足元には自分たちで拾った貝殻が埋め込まれており（写真29）、それを見れば今も当時のことが思い出され、自分たちの建物、自分たちの地域を自分たちで作っていくという気持ちが湧いてくる。こうした経緯も含めて次

世代へつないでいきたいという思いがあったという。

「あまはじ」を設けたのも、昔から集落には字公民館を中心に助け合う暮らしがあり、日陰で風通しの良い空間が人との交流を生むという考えからであり、そうした設計コンセプトと自力建設のワークショップが村民の一人ひとりに様々な思い出と交流の絆を作ってきたという。

(3) 公民館の新たな活用

こうした中央公民館の保存と活用の動きに合わせるように、2023年から「なきじん夜市」が開催されるようになった（写真30）。慰霊の日に開催される。

「なきじん夜市」は、2022年12月から毎月第3日曜日に「なきじん日曜日」として開催されてきたが、新型コロナウイルスの感染拡大のため一時中止になっていた。しかし、ロシアのウクライナ侵攻による窮状に心を寄せ、平和の祈りを込めて2023年2月に「想いを灯す なきじん夜市」を「ゼロ回目」として開催したところ、村民約1,500名が来場し大変好評であったため、6月23日の慰霊の日に合わせて初めて「第1回なきじん夜市」として開催されたものである³。

主催は「ウェルビーイングなきじん夜市実行委員会」で、地元在住者の戦争体験や戦没者約2000名の名前の読み上げ、「沖縄ウクライナ難民救済協会アワーズ」による現地とのオンラインによるトーク、映画上映（故中村哲医師「荒野に希望の灯をともす」）といった平和に関するステージの他、エイサーや太鼓の演奏、飲食店15店舗、複数の物販店の出店、小学校や大学の参画により多くの村民が集った（写真30・31）。

実行委員長の石川清和氏（1960年今帰仁村生れ）に7月16日に電話でお話を伺ったところ、1995年に地元の診療所に戻ってきた頃から中高生の南部流出が問題になっており、数名の仲間と一緒に地域活性化のために毎月第3日曜日に「日曜日」をおこなった

3 「なきじん夜市」については、奥谷三穂「今帰仁村における慰霊碑と慰霊に関する聞き取り調査」『2023年地理学実習現地調査報告書 那覇市』京都府立大学文学部歴史学科文化遺産学コース（上杉研究室）2024.3.21発行、において、慰霊祭の様子などについて詳細を掲載している。

ことが始まりだったという。「この地域の自然の豊かさや多様性、海・山の美しさ、地域の魅力をまず地元の人たちに知ってほしいと思って続けてきたが、次第にNPO法人や若い人たちも協力してくれるようになってきた。2023年2月のゼロ回夜市、6月23日の第1回夜市は大いに盛り上がりよかったと思っている。なんといいても村の中心にある乙羽岳は村民の心のふるさとであり、乙羽岳の見える広場で開催することでみんなの気持ちひとつになる」とのことであった。

このように村の中心にある中央公民館は、50年近くたった今も村民のコミュニティの中心であり、交流の場として広場から見上げる乙羽岳とともに村民のシンボルになっている。中央公民館は現在も専門家による塩害による損傷状況を調査しながら、学生や地域住民とともにワークショップ形式で修復が続けられている。

あまはじの藤野敬史氏は「一緒に作業することで修繕の必要性に気付いてもらうことができ、地域住民も役所の職員もみんなの建物という愛着が深まる」と話し、今後の継続的な活動が期待される。

(4) 小括

今回は「第1回夜市」には参加することができなかったが、準備の状況や後からいただいた写真、インスタグラムなどにより村民の期待と熱気が感じられた。前夜の今泊地区でのワークショップにおいても、今泊のフクギを守りながらなんとか地域の活性化に結び付けられないかと参加者から熱心な意見や提案が出されていた。今泊のフクギ、今帰仁城跡、中央公民館とそれぞれの場については成立の背景や位置、歴史も異なるが、村民のシンボルとして大切にされていることがわかった。

Ⅳ．本部町のフクギ現地調査 (備瀬地区・瀬底地区)

1. はじめに

今帰仁村今泊のフクギ屋敷林と集落景観の調査の一環として、2024年2月25日～28日にかけて一般社団法人本部町観光協会への聞き取り調査と備瀬地区のフクギ並木調査並びに瀬底区長への聞き取り調査とフクギ屋敷林、拝所等の現地調査をおこなった(写真32)。

調査の目的は、本部町備瀬のフクギ並木及び瀬底島フクギ屋敷林の保存と活用のあり方について関係者の聞き取り調査と現地調査をおこない、今帰仁村今泊地区との比較をおこなうことである。はじめに各調査先での聞き取り調査と現地調査について記録し、次に調査結果を振り返って今泊地区との比較をし、フクギ屋敷林と集落景観の保存と活用のあり方について考察する。

【本部町の基本情報】

人口12,944人(令和6年1月1日現在)、本部半島の先端にあり古くから北部港湾の中心地であった。琉球三山時代は北山城(今帰仁城)の勢力下にあり、1641年の北山敗北後、中山の尚巴志により第一尚氏王朝時代の基礎が造られ、今帰仁間切に属した。1666年伊野波間切が新設され、翌年本部間切に改称され現在の本部町の基礎となった。町内には備瀬、瀬底はじめ15の行政区がある。

2. 一般社団法人本部町観光協会への聞き取り調査と備瀬地区のフクギ並木の状況

日時：2024年2月26日(月)午前11時～12時

場所：一般社団法人本部町観光協会
本部町字大浜881-1

インフォーマント：会長：當山清博氏、
事務局長代行：崎浜秀明氏

調査・報告者：奥谷三穂(京都府立大学文学部歴史学科共同研究員)

*前日から備瀬地区に宿泊し集落内を調査した。



写真32 本部町観光協会にて
右から崎浜氏、當山会長、奥谷

(1) 備瀬のフクギ並木の歴史と観光

當山会長によれば、備瀬地区は約350年前は砂地だったが、琉球王府の三司官に任ぜられた蔡温(1682～1762年)が、1736年から北部の山林政策をおこない、備瀬もその対象となり現在のようなフクギ集落が形成されたという。元々の住民は集落の東側にある城山(グスク山)を中心に暮らしていたが、蔡温の山林政策により現在の地区となる海側の弓状になった低地に移住を命ぜられた。そこでまず集落の中心となるところに拝所(アサギ)を設け(写真33)、城山からまっすぐに海岸へとつながる道を作った。そして砂地を盛り上げてフクギを植え、防風林、防潮林、防砂林とした。集落の形成には蔡温による風水を重んじ、外から邪気が入らぬよう、また良い気が逃れないように道を蛇行させ、集落は海岸線から一段高く砂を盛り、道は基盤の目のようでありながらも風を通り抜けさせるように作られている(図8)。集落の農地はフクギ並木の東側のグスク山方面に広がっている(写真34)。

フクギは今泊のような屋敷を取り囲む敷林ではなく、特に西北側や海側はミーニシ(北風)を遮るように二重にびっしりと植え(写真35)、「抱護」といって集落を取り囲むように植えられている。実際に前日の備瀬はミーニシが強く吹き、海側は風速10メートル近くあったが、一步集落内に入ると風はほとんど止んでいた。集落内のフクギは区画を取り囲むように植えられ、それらが連続して並木となっている(写真36)。



図8 備瀨地区の地図
地理院地図を基に作成



写真33 集落内の中心にあるアサギ
正面の賽銭箱の上に、参拝の方法が書かれている（資料1参照）。



写真34 備瀨集落の東の端
左手の集落側はフクギ林に覆われている。右側が農地でグスク山へと続く。

當山会長によれば、今帰仁村今泊地区のフクギは、北山の武士の城下町として栄えた集落であるため一軒一軒の屋敷が大きく、屋敷林として植えられフクギも太いが、備瀨は区画を取り囲むような並木が特徴だという。これまでの研究者の調査によれば面積約1.46km²中、約70%がフクギ林に覆われて

いる（陳、p.155）。

このように備瀨のフクギは、約300年にわたって住民の農業と漁業による生活を守るために計画的に植えられ育てられてきたものであったが、状況が変化したのは1975年に開催された沖縄国際海洋博覧会（以下「海洋博」と表記する。）であった。海洋博の跡地は、



写真 35 備瀬地区西側海岸沿いのフクギ林



写真 36 海岸から集落へ入る道のフクギ並木
風水に随い蛇行している。



写真 37 集落の生活道路である中通りを
歩く観光客



写真 38 集落の中通りを道いっぱいに進む
水牛車観光

翌年の 1976 年には国営沖縄海洋博覧会記念公園となり水族館や植物園、郷土村として沖縄北部の観光拠点となる。そして、2002 年に国営の水族館は閉館され、沖縄美ら海水族館がオープンすると世界中からの観光客が押し寄せるようになる。

備瀬地区のある本部町では、こうした観光客を本部町内にも誘導させられないかと検討する中で浮かび上がったのが備瀬のフクギ並木の景観だったという。

(2) 備瀬の観光の課題と対策

海洋博をきっかけとして徐々に観光客が増加し、備瀬地区にも訪問するようになると、様々な問題が起こってきた。集落のシンボルでもあるアサギ（拝所）にサンダル履きで立ち入ったり、家の敷地内に立ち入りトートメ（仏壇）の前で家の人たちがご飯を食べているところをのぞき込んだり、ヒンプン（正面入口の石門）の前や庭で写真を撮ったりといったプライバシーを侵害するような行為、又はフクギの根元の石垣に腰掛けて飲食したり食べ歩きするといったマナーの問題。さらに、集落内のたった一本の生活道路を道路いっぱいになって歩いたり（写真 37）、自動車や電動キックボードでスピードを出して走る交通問題などが頻繁に起こるようになってきたのである。

また、観光協会への問い合わせも多くなり、そのほとんどが観光客からの苦情だという。一番多いのは駐車場が少ないということで、道が狭く車や人が通りにくい、トイレや案内所など観光者向けのサービスが不十分といった内容がほとんどだという。また、水牛車観光への申込みや問い合わせも多いとのことであるが、水牛車観光は観光協会が実施しているのではなく個人の方がされており協会としては関与されていない。むしろ狭い道を水牛がいっぱいになって通るため（写真 38）、車や観光客の通行の妨げになっており、そのことも問題となっているという。

問い合わせの中には、フクギ並木は何時から何時までオープンしているか？入場料が必要かといった質問もあり、テーマパークのように思っている人もいるという。

住民からの苦情はひとまず区長の所へ届



写真 39 備瀬地区集落入口（駐車場）に掲げられている案内板

フクギ並木の由来と主なビューポイント、散策路の案内や私有地への立ち入り禁止などが書かれている。



写真 40 フクギ並木内の散策路の順路サイン（灯り付き）



写真 41 車両の進入禁止を示すサイン



写真 42 電動キックボードや自転車の走行を禁止する看板

けられ、集約して観光協会に伝えられたり、場合によっては対策を協議されたりしている。

駐車場については、フクギ並木の入口付近に町営の無料駐車場があり、20～30台ほどが止められるようになっているが、シーズンにはあふれてしまう。有料化も検討されたことがあるそうだが、近隣の飲食店やお店の方が反対した。集落の東側には耕作放棄地があるため、今後有料駐車場として整備することも検討中であるという。

フクギ並木入口にはフクギの由来や散策路、ビューポイントなどとともに「私有地への立ち入り禁止」などの注意が書かれた案内板が掲げられている（写真 39）。集落内には散策路の順路を示した看板や車両、自転車や電動キックボードの通行禁止なども掲出されており、これらは町役場が設置しているという（写真 40～42）。

また、協会としては観光客がアサギに立ち入らないようにコーンを置いたり（写真 33）、アサギの由来や参拝の心得を拝所の正

面に張り出している（資料 1）。

また、区民向けには次のような協力の呼び掛けをしている（資料 2）。これには、フクギ並木の歴史と区民の生活を守りながら、観光資源としても生かしていこうといった趣旨が書かれている。住民は観光客のマナーの悪さに対して「しょうがないさー」と言う人と「いやまてよー」という人がいるという。当山会長としては、歴史・文化と観光とのバランスをどう取るかが、大変難しいとのことであった。

(3) 今後のあり方

・大切にしたいこと

当山会長に今後の備瀬集落のあり方について伺った。

集落は、自然、歴史、文化、祭事、供食の 5 点が揃って成立している。その中でも集落を守るウガンが最も重要である。今でも区長はじめ年配の 12～13 人でアサギを中心として年中行事をおこなっている。備瀬

ウカミヤは、神殿（神様三休祭）祀

アサギヤは、拝殿

備瀬集落は六百五十年に創設されたと云われ、完全な村落が形成されたのは、三百五十年前後と考えられる。

このアサギヤ（ウカミヤの神）は、備瀬区の始祖神として崇拜され、総ての祭事は、この場を中心に行われています。

アサギヤは、神殿も拝殿も去る戦争の戦禍から逃れ、今に昔ながらの偉容を呈している。

これも、備瀬の氏神様により神押しで守られ、備瀬区民の信仰が深いことから天地の神様がお護り頂いたものと信じます。この場所は備瀬区一の聖地で、年初めにはアサギヤで、神人達が初御願（パチーウガン）で始まり、十二月までの数々の祭事、御願を行います。

字民の無病息災、農作物の豊作祈願（五穀豊穣）大漁祈願と拝みます。

観光のお客様は、パワースポットとして、心の中で、お拝み思いのパワーをもらって下さい。（二礼・二拍・一礼）

資料1 アサギ正面の賽銭箱の上に書かれているアサギの由来と参拝の方法

美しい福木並木を大切に育てましょう

備瀬区の福木並木は区の生活を守り続けて、

350年の歴史があります。

風を押さえ、潮砂が飛んでくると区民を守

り、北風が吹くと寒さと農作物を守り、火災の

時は隣への延焼を防ぎ生活を守ってきました。

これも区民が大切にしてきた証です。

今日、観光客が訪れてくることも素晴らしい

日本一の福木で、並木で癒され、パワーをもら

いに来ます。

福木を大切に育て、生活を守り観光資源とし

て育てて行きましょう。

備瀬区、区民の御協力をお願い申し上げます。

備瀬区事務所

資料2 区民向けの協力依頼文

フクギと生活を守りながら観光資源としても生かしているように書かれている。

には古くから伝わるシヌグという祭祀があり、町の有形民俗文化財にも指定されている。

人々の信仰の思いは厚く、一つのエピソードとして、ある時備瀬に観光に来た人が海岸で石や貝殻を拾って本土に持ち帰ったところ、家族の具合が悪くなったからと言って郵送で観光協会に返してきた。手紙には海岸のどこかに返してほしいと書かれてあった。そこで當山会長らはお酒を用意して海岸へ行き、この辺りかなと思われる場所を探してウガンをし、それらの物をお返しした。こういったことは沖縄では珍しいことではない。後日、本土の方から、家族の具合が良くなったとお礼の手紙が届いたという。

本部町の中でも備瀬は昔から特に神聖な地区といわれ、集落の外で亡くなった人は集落の中に入れず、家に戻さないという風習があった。今はそうしたことはなくなったが、それほどに穢れを嫌っていたのだ。

このように自然と共にある祈りの文化を大切にしてきた備瀬に、突如観光客がやってきたのである。観光のマナーやルールを作る前に観光客が押し寄せてきたため、対策が後手になったということは否めないが、それでも今帰仁村の古宇利島のような観光開発はしたくない。オーバーツーリズムによる問題やお客さんからのおもてなしの要望と住民の生活とのギャップの調整が難しいが、観光客には備瀬の祭事やフクギを大事にしている「非日常」を知ってもらい、そういう場で癒される機会を提供していきたいという。

また、「自然、歴史、文化、祭事、供食」のひとつとして食べる物も地産地消で提供し、第一次産業の発展につなげたい。備瀬は天と地と海で成り立っている地域であり、観光においても持続可能な地域として発展させていきたい、とのことであった。

・ルール作りについて

今後は観光客のためのルール作りとして、観光マナーの啓発と遵守の他に、災害時の対応を検討していきたい。地震や台風といった災害が起こった際に、先ず第一に住民や観光客の安全を確保し、避難所への誘導、帰宅困難者への対応といった手順を決めていきたいとのことであった。

新たな問題として、オーナーやスタッフ不在の宿泊施設ができたということがある。筆者も前日はそうした宿泊施設に泊まったが、チェックインや問い合わせは全てLINEか電話でおこない、チェックインからチェックアウトまで誰とも顔を合わせることがなかった。万が一の際には連絡すれば10分で到着するとのことであったが、連絡ができないような緊急事態や周辺の被害状況によってはスタッフが到着できないということも考えられる。孤立した場合には宿泊施設には飲料や食べ物もない。その上、テレビはフクギが伸びすぎて受信できないとのことで、緊急の情報はラジオを聞いてほしいとの説明があった。

観光協会としては、民宿であれば住民と一緒にいるが、こうしたスタッフ不在の宿泊施設については問題があると考えており、何らかの対策が必要という。

また、カフェや土産物店などは外部から来た人による経営が多く、観光協会には半分くらいしか加入していないという。観光ルールの順守やとりわけ災害時などの緊急を要する場合には、集落全体で共同して対応しなければならないため、協会への加入など組織強化も課題である。

本部町の観光政策としては、年間100万人の宿泊客を目指しているという。コロナ禍で減少したが、それ以前では本部町全体で年間約500万人の観光客があった。その内宿泊者は2019年度で78万人であった。観光客のほとんどは美ら海水族館の入館者であるため、町内に滞在し宿泊する人はそれほど多くはないということである。これは宿泊施設が不足しているためということがあったが、これまではオリオンビール系のホテルがひとつだったが、今年からヒルトンホテルも瀬底島に二つできたとのことで、人口13,000人の町に100万人の宿泊客を受け入れる体制が整いつつあるという。

その内、備瀬では修学旅行生だけで約10万人の受入れがあり、民泊は2019年度では2万人の宿泊者があった。2022年時点で人口372人、183世帯の小さな集落であるため、ルール作りによって住民の生活と観光客の利便性の両方のバランスを取っていきたいという。



写真 43 住民の方によるフクギ並木の掃除の様子



写真 44 「緑の募金」を活用した植林

・フクギの管理

フクギの管理については、古木や伸びた枝の剪定、普段の落ち葉掃除などは家ごとにおこなわれている（写真 43）。海岸沿いの最北端では「緑の募金」を活用してフクギの苗が植林されていた（写真 44）。

また現在、琉球大学が樹木調査を実施しており、全体の3分の1から2分の1くらいは調査できたという。陳氏の調査によれば、最も高い木で18.3メートル、平均樹高は約5メートル、最高樹齢は266年で平均樹齢は46年とのことである（陳 p.164）。一本一本の樹勢を調査し、伸びすぎた木の剪定や枝払い、枯れた木の除去などの対応を順次進めていく予定とされている。

フクギは成長が早く年間で15～30センチメートルも成長する。それが道の両側から伸びるので全体がますます覆われていく。実際に歩いてみて昼間でも暗い所があり、廃屋や空き地も点在していることから防犯面でも心配があるのではないかと思われた。

以前、フクギを伐採しようという意見があったが、歴史もあり植物も人も大切にすべきだという区民からの反対意見があり伐採はされなかったという。

今泊地区ではフクギが電柱や電線を覆うと停電になることから伐採されているが、観光より生活を重視して管理されているためであり、備瀬ではできるだけ伐採せずに守っていきたい考えだという。

・空き地問題

空家は10%くらいとのことであり、空き地になっても仏壇のあるカミヤーだけが残されている所もある（写真 45）。若い世代が南部方面へ働きに出ていて今は不在になっているが、やがて戻ってくるつもりになっているところが多いという。実際に歩いて見たところ、売地になっているのは2～3か所だった。

しかし、空き地となった区画では主幹や枝が大胆に伐採されているところもあり、廃屋もそのまま草が生えて放置されているところも各所にあった（写真 46・47）。

元々観光地として整備されているものではないため、これが現状ありのままの集落の変わりゆく姿であるには違いないが、何らの事前知識もなく観光や景観を楽しむことを目的として訪問する観光客の視点からすれば、これらがどう捉えられるのか、生活の場を観光地とすることの難しさを感じさせられた。

(4) 小括

備瀬地区のフクギ並木は、約350年の歴史を持ち、アサギを中心とした風水によって集落が形成され、農業と漁業を生業とした暮らしが拜所の祈りの文化とともに続けられてきた。

しかし、1975年の海洋博の開催を契機として徐々に観光客が流入するようになり、住民の生活と観光との間で様々な問題が生じるようになってきた。

本部町は、1973年に海洋博による無秩序

な土地開発を防ぐために町内全域を都市計画区域とした。備瀬区域は「特殊基準区域」として容積率 100%、建ぺい率 60%と他の地区に比べ建築制限が設けられている。2016年に制定された第4次総合計画では、基本目標のひとつに「魅力ある集落空間の創造」を掲げ、備瀬区のフクギ並木の集落景観を積極的に保全していくことが求められている。2011年には本部町景観条例の制定と景観計画が策定されており、中でも沖縄の伝統的集落が残る備瀬地区は「景観形成重点地区」と位置付けられている。具体的な施策としては、フクギ屋敷林、拝所といった歴史的資源の保全・活用のために「本部町備瀬観光集落整備事業」等の実施を進めていくこととしている。

また、観光政策としては、美ら海水族館を中心として観光を主要産業の一つとして捉えているものの、宿泊者は入域者の約1割にとどまっていることから、今後は地域資源を生かした保養・滞在型観光プランの充実を図っていくこととしている。

こうした中で、地区別の課題として「備瀬行政区では平成26年に「フクギの里」宣言をおこない、知名度が高まり観光客も増加傾向にあるが、集落内を巡るマナー等が問題となることもありその対策が求められている」と記されている。

以上のとおり町としても課題の認識はされているものの、當山会長のお話にあったとおり、伝統的な暮らしを守りつつ観光とのバランスをどう取るか、現場での判断が大変難しい状況となっていることがわかった。

また、伸長するフクギをどのような基準と方法で管理するのかという課題も抱えており、現在、大学等専門機関との連携により調査が進められ、適正な管理方法が検討されているところであり、今後の対策に注目したい。



写真 45 カミヤーだけが残されている空き地



写真 46 空き地となり枝と主幹が伐採されたフクギ



写真 47 放置されている空き地

3. 瀬底島の拝所とフクギ屋敷林

日時：

2024年2月26日（月）13時～17時

瀬底区の拝所調査

2月27日 9時～12時

瀬底区のフクギ屋敷林調査

13時～14時

瀬底区長の聞き取り調査

（瀬底区事務所）

インフォーマント：NPO 法人瀬底トラバ
ーチン 松本直也氏（拝所・フク
ギの案内）、一級建築士事務所あま
はじ 藤野敬史氏、藤野菜々恵氏
瀬底区長 内間清彦氏

調査・報告者：奥谷三穂

*瀬底島へは2023年6月23日に一級
建築士事務所あまはじの藤野敬史氏
の案内により一度調査に訪れている
が、途中で豪雨に会い十分な調査が
できなかつたため、再び訪問し、拝
所に詳しい松本氏や瀬底区長の内間
氏にヒアリング調査を実施した。

(1) 瀬底の概要

瀬底は国頭郡本部町にあり、本島とは全
長763メートルの瀬底大橋で結ばれている。
面積2.99平方キロメートル、海岸延長7.3
キロメートル、最高標高76メートルと小
さな島であるが、人口862人、戸数427戸
（2022年1月1日現在）で、人口は移住者
により増加傾向にある。観光地としては瀬底
ビーチが有名である。2022年4月には総延
長5.4キロメートルの瀬底島一周線が開通し、
車で島を約10分で一周できるようになった
（図10）。

「瀬底」の地名が文献に出てくるのは、
1471年に記された朝鮮申叔舟の「海東諸国
紀」に所収されている琉球国図であり（図
9）、これは博多の僧道安が1453年に朝鮮
に行った際に献上したものの中に納められて
おり、申叔舟がこれを模写したものと言わ
れている（瀬底誌.p10）。地図の中に「世々
丸 有人居」と記された島があり、これが
「瀬底」の初出である。島内の遺跡からおよ
そ3～4千年ほど前から人間が住んでいた

と考えられる。現在の住民の祖先は、三山
統一時代（1429年）、中山の尚巴志が浦添
から首里に拠点を移し、北山（今帰仁城）と
南山を攻め落として一つの王国に統一した
後、1469年に尚巴志の孫に当たる中山王
尚徳が滅亡した時、今帰仁按司も廃官とな
ったため、今帰仁城を追われた大底（大城）
の武士が瀬底島に住み着いたのが始まりと
いわれる（瀬底誌.p38）。三山時代は北山
に、三山統一後は北山監守の治下であり、今
帰仁間切瀬底村として首里王府から脇地頭
も置かれた。近世に入り、1666年伊野波間
切（本部間切）の創設により本部間切瀬底
村となり、1736年に三司官の祭温の山林
政策により対岸の石嘉波村が瀬底島に移住
させられ、以後1島2村制となった。1903
年には瀬底村と石嘉波村が合併し今日に至
っている。しかし、今でも拝所での祭祀は
別々におこなわれている。今回の調査では瀬
底区の拝所とフクギ屋敷林を中心に廻った。

(2) 拝所の調査

瀬底島には区として大切にされている拝
所や慰霊の場が14か所あり（図10）、その
うち特に大切にされているウタキが7か所
ある。これらの拝所は瀬底区の発祥の歴史と
深く関わっており、文化的な景観の要素とし
て重要であるため調査をおこなった。

①ウチグシク（★七ウタキのひとつ）

ウチグシク（内城）は村落の南東にあり（図
11）、写真48の右側は崖になっている。大
底（大城家）の祖先が1469年に移り住んだ
瀬底村落の発祥の地と言われ、グシク時代の
住居跡や瀬底貝塚がある。ここをクサティ（腰
当）にして西北に集落が広がった。写真49
の拝所には瀬底村の中心となる祖神を祀り、
手前には鳥居があり広場では主要な祭祀がお
こなわれる。左奥は風葬の場所だった。写真
48の祠の左手にある石碑には「内城按司ノ
口の墓」と書かれている。

②祝女火神（ヌルヒカン）（★七ウタキのひ ひとつ）

祝女火神はヌルルンチ（ノロ殿内）と
もい、ノロの管轄である（写真50・

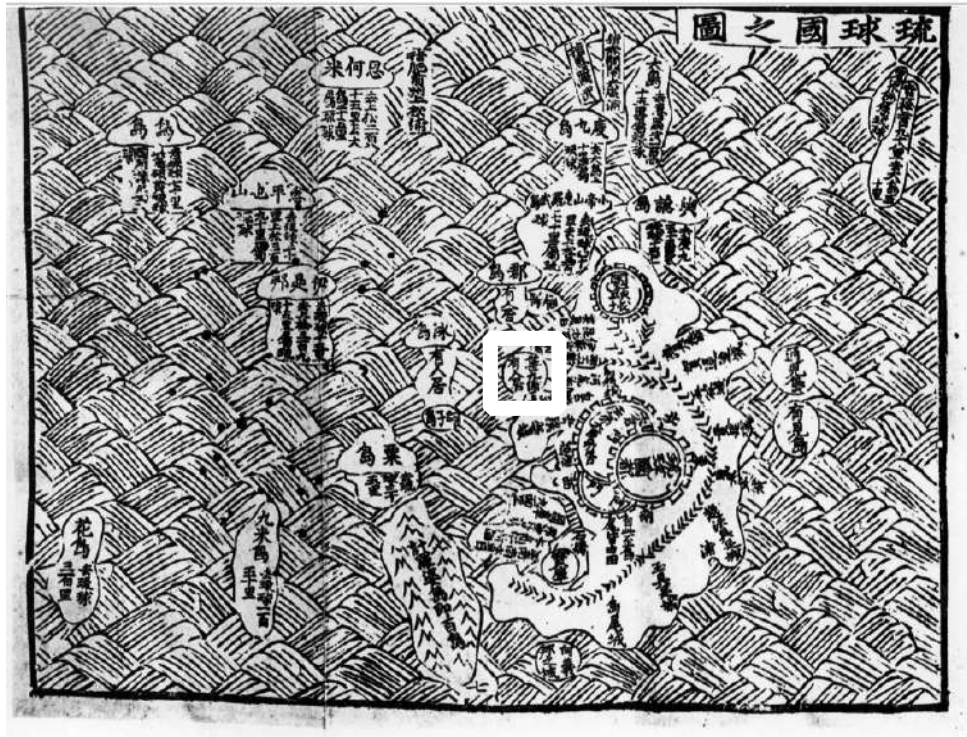


図9 『海東諸国紀』にある「琉球国之図」
白四角部分に「世世九浦 有人居」と記されている。

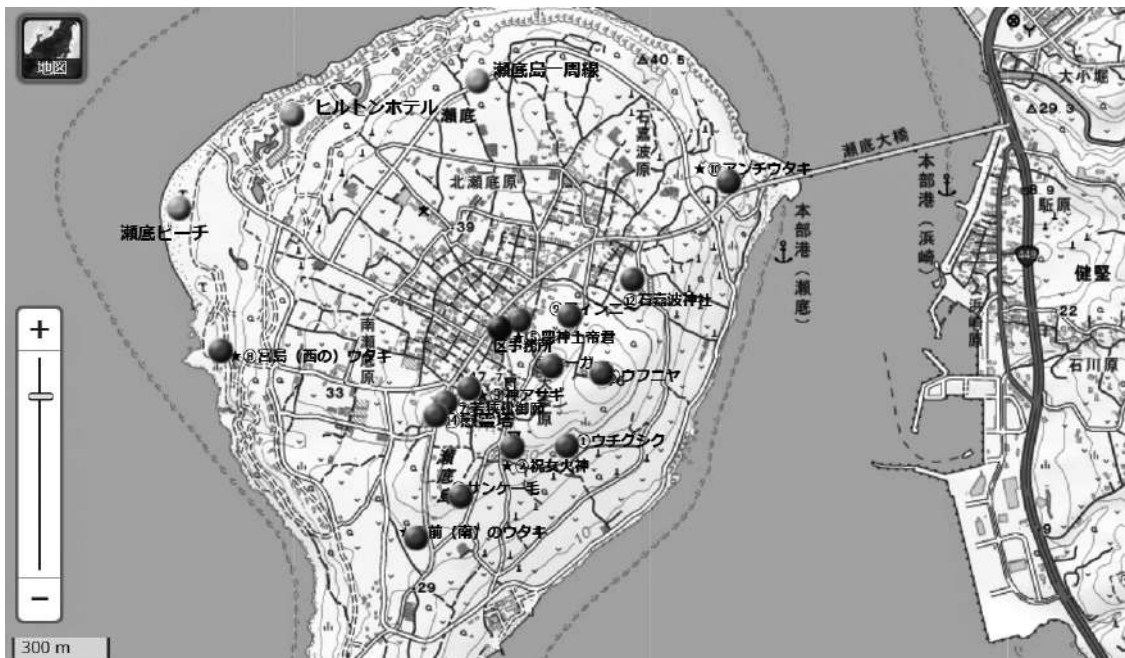


図10 瀬底島の拝所の位置図

主な拝所は14か所あり、その内★印は7ウタキとして特に大切にされている。拝所は神聖な場所であり住民以外は立ち入り禁止である。



図 11 南部の拝所地図

- ①ウチグシク ②祝女火神 ③神アサギ ④前 (南) のウタキ ⑤農神土帝君 ⑥ウフニヤ
 ⑦若狭松御願 ⑧宮島 (西の) ウタキ ⑨ケーガー ⑩サンケー毛 ⑪慰霊塔



写真 48 拝所の右手側の東の崖に祀られている祠



写真 49 ①ウチグシクの拝所。左奥は風葬場



写真 50 鳥居と「のろ火の神」と刻まれた石 (左側)



写真 51 ②祝女火神 (ヌルヒカン) の祠

51)。ウチグシクの入口にあり鳥居の奥に南方向に向いて屋根瓦の祠がある。村落のほとんどの祭祀で拝まれる。『琉球国由来記』に「瀬底村、瀬底巫火神」とある。祠の左の石に「のろ火の神」と刻まれている。

③神アサギ・根所（★七ウタキのひとつ）

神アサギは、神様を迎え招宴する場所で、大城家（ウフジユク）の現在の瀬底ノロの屋敷内の東側にある（写真 52・53）。アサギの中の「タムト木」という丸太が神の依り代である。戦前のアサギは米軍の 10・10 空襲で焼けたため、戦後にコンクリート葺きで再建された。神アサギの北側に根所と呼ばれる祠があり、根火神が祀られている。大底（大城氏）門中の火神であるといわれている。瀬底の殆どの祭祀で拝まれる。神アサギの東側は広場になっており、季節ごとに伝統の祭りやイベントがおこなわれる。

④前の（南の）ウタキ（★七ウタキのひとつ）

前の（南の）ウタキは拝所の中でも最も南にあり標高 30 メートルほどであるが南側に突き出た所にある。ブロックづくりで石と香炉が安置されている（写真 54）。「国守りの神」と言われ、5 月と 9 月の大御願に七ウタキが拝まれるが、前のウタキは最後に拝まれる。詳しいことはわからないという。ここを拜んだ後、⑬のサンケー毛へ行き、水納島に向かって神人全員が拝みタンカー（お通し）をする。

⑤農神土帝君（トーテークン）（★七ウタキのひとつ）

土帝君は中国古来の土地の神の一種で、瀬底では尚敬王（1713～1751 年）の時代に、上間家 2 世健堅親雲上（1705～1779）が山内親方に随行して清国に渡った際に、「農神土帝君」の木像を持ち帰って祀ったのが始まりといわれる。土帝君は本部間切の地頭代を務めた上間家の所有で、毎年旧 2 月 2 日に祭礼がおこなわれているが、大正の頃から村も関わるようになり、七ウタキの一つとして 5 月と 9 月の大御願行事でも拝まれるようになった。沖縄県内でも最大規模の礼拝施設で、石垣で 3 段に区切った敷地に珊瑚礁

の巨石を用いた本殿（イビ）、拝殿（アサギ）、庭（ミヤー）が整然と並び、土帝君信仰の建造物の形態をよく表しており、1997 年に重要文化財に指定された（写真 55・56）。土帝君像は沖縄戦の最中に米軍に持ち去れたため、現存するのは戦後に上間家が購入したものであるという。

⑥ウフニヤ

ウフニヤは遠見台、狼煙台のことで、瀬底島で最も標高の高い標高 76 メートルの地点にある（写真 57）。かつては島津藩や中国との貿易船の出入りを見守る遠見番（トゥーミ）の職がおかれ、伊江島から船合図の狼煙が上がると烽火をあげて読谷村や座間味に伝えたという。現在は旧正月に区長が村人の健康と繁栄を祈願する。コンクリート造りの祠の中に香炉が三つ置かれている。

隣接して生活の水を供給している給水塔がある（写真 58）。

⑦ワカサマチウガン（若狭松御願）

かつては青々とした立派な松の木があったので、この名が付けられた（写真 59）。仲田門中と関りがある。地区の中央を通る中道の前辺りにあり広場があることから、瀬底ノロは近年、ここで御願行事をおこなうことが多いという。

⑧宮島ウタキ（西のウタキ）（★七ウタキのひとつ）

宮島ウタキはミヤートウヤ御嶽、イリヌ御嶽（西のウタキ）と呼ばれ、村落の最も西側の海岸近くにある。写真 60 はウタキへ降りる入口に祀られてている祠で左側の石には「宮島拝所 一九九二年八月吉田改築」と刻まれており、祠も比較的新しい。祠から左手方向に向かい 2～3 メートル下がった窪地に広い洞穴があり、瀬底村初代公儀ノロの骨神を祀ったノロ墓の他 3 つの墓がある（写真 61）。このノロはある時、豊作祈願の前に洗い髪をして身を清めていたところ、唐泊に碇泊していた船乗りが暴行され、宮島御嶽に身を隠した。ノロは暴行した船員に呪いをかけたところその船が難破し全員死亡したという。ノロはそれを見届けた上で命を絶



写真 52 ③大城家の屋敷の敷地内にある神アサギ
(松本直也氏提供)



写真 53 神アサギの東側の広場



写真 54 ④前の(南の)ウタキ



写真 55 ⑤土帝君の拝殿(アサギ)と庭(ミヤ)



写真 56 ⑤土帝君の本殿(イビ)



写真 57 ⑥ウフニヤ(遠見台)



写真 58 瀬底配水池
平成4年竣工、容量2000m³



写真 59 ⑦ワカサマチウガン(若狭松御願)

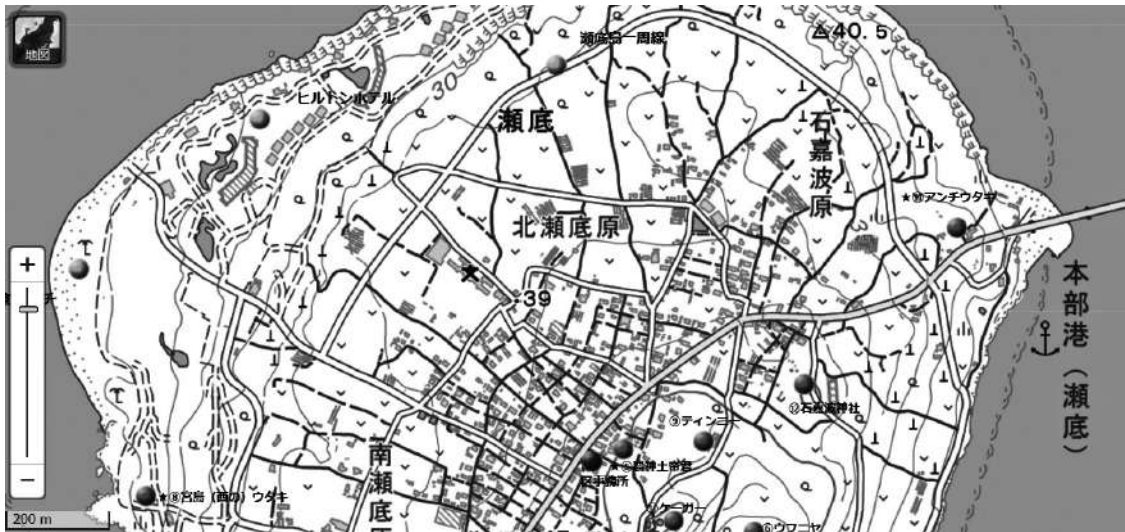


図 12 北部の拝所地図

⑨ティランニー ⑩アンチウタキ ⑪ケーガー ⑫石嘉波神社

ち、ここにはその骨神が祀られている。

⑨ティランニー（穀物豊作祈願所）

図 12 のように、島の中央やや東側に位置する。畑の脇にある深さ 5 メートルほどの縦洞穴に、ウフシヌヘー（男ノロ）とノロがはしごで下り、豊作祈願のため「模擬性交儀式」をおこなったという。現在は縦洞穴の手前にある祠で祭事をおこなう（写真 62）。

⑩アンチウタキ（★七ウタキのひとつ）

現在は瀬底大橋の付け根の下になっているが、1985 年に橋ができる前は本島と船で行き来をしていたため航海安全を祈願する祠が安置され「トゥケーワタイ」と言って神に祈ったという。巨大な琉球石灰岩の岩にガジュマルが根を巻き付けて岩と樹木が一体化している（写真 63）。他の拝所とは異なり、全面が閉じられ中に甕が納められているという。ウタキの下の方には「浜番屋」が置かれ、明治末期頃から船の渡し守りをした岸本家がある。今も渡し場の栈橋は残っている。

⑪ケーガー（拝出泉）

ケーガーとは飲料水をためる池のことで、瀬底で最も高いウンバーリの西方の低地に 4 つのため池がある（写真 64・65）。旧 9 月 9 日に各門中のハー（拝出泉）を拝んだ後に、ケーガーにおいて水への感謝、村落の繁栄、

住民の健康を祈願する。上水道が完備されるまでは飲料水として使われていたが、現在は農業用水として利用されている。拝所の入口の鳥居は崩れている。

⑫石嘉波神社

現在の本部町健堅（ケンケン）区に隣接していた石嘉波村が、1736 年に蔡温の山村政策により瀬底島へ移住することになったため、村民によって作られた拝所で、周辺には根所やアサギが集結している（写真 66・67）。図 12 の「石嘉波原」と記された辺りで、瀬底島の北東、石嘉波神社から北側に集落が形成された。これにより瀬底島ではふたつの集落が一つになって瀬底区となった。しかし、祭祀は現在も瀬底村落とは別々におこなわれている。

⑬サンケー毛

5 月と 9 月の大御願で七ウタキの最後に③の前の（南の）ウタキを拝んだ後、瀬底島の南東の高台にあるサンケー毛へ行き、水納島へ向かって神人全員が拝む。神の島といわれる水納島へのタンカー（お通し）であるという。サンケー毛には大底（大城）門中と上間門中の拝所があり、大底門中の石碑には第一尚氏の系譜の名が書かれている（写真 68・69）。



写真 60 ⑧宮島ウタキの入口にある拝所



写真 61 初代公儀ノ口の骨神が祀られている墓



写真 62 ⑨ティランニーの祠



写真 63 ⑩アンチウタキ（航海安全祈願所）



写真 64 ケーガーのため池



写真 65 ⑪ケーガーの拝所



写真 66 ⑫石嘉波神社



写真 67 神社の手前にあるアサギ

⑭慰霊塔

太平洋戦争で亡くなった軍人・軍属 81 名、住民 197 名合計 278 名の戦没者が刻銘されている（写真 70・71）。毎年 6 月 23 日の沖縄慰霊の日に区民が参加して慰霊祭がおこなわれる。

沖縄戦では 1944 年の十・十空襲で瀬底国民学校やアサギ、民家などが焼けた。住民も満 17 歳以上満 45 歳までの男子が補助兵として沖縄守備軍に召集され、南・中・北及び伊江島飛行場の建設工事に従事させられた。14 歳以上の師範学校、中学校生徒は学徒動員させられた。高等科卒業生は青年学校に入学し「国・算・農」と軍事教練を受けていたが、各種備蓄に配備され、米軍施設の爆破、夜間斬込みのゲリラ戦を命じられた。第二次防衛召集では「根こそぎ動員」といって、17 歳未満、45 歳以上の老若者及び女性までも徴集させられて伊江島飛行場で使役された。残った住民は島内や島外のガマや亀甲墓に避難したが、爆撃を受けて亡くなった人も多かった。召集された兵士の中には、京都の兵士が多くいた第 13 大隊に属し、嘉数高地での激戦で負傷しながらも南部へと逃れて終戦後に米軍の捕虜となって生き延びた方もあった（上間勝栄氏の証言から、瀬底誌 .p.545）。

(3) 拝所の調査と住民の暮らしの変化

以上のとおり、瀬底島にあるウタキ、拝所 14 箇所を調査した。拝所の位置は図 10 のとおり、集落の東側から取り巻くように、海を臨む場所や最も標高の高い所、ケーガーのようにため池がある場所、その他ウチグスクのように村の発祥に関わる所などそれぞれの地形や方角に従って配置されている。

特に大底（大城家）のウチグスクを腰当てにして瀬底集落が広がってきたが、琉球王府の時代に本島の健賢から移住してきた石嘉波村は島の北東に旧瀬底村とは別の集落を形成した。1903 年に瀬底村と合併してからも瀬底区と石嘉波地区はそれぞれのウタキを中心に祀り行事は別々におこなわれている。このように多くの沖縄の集落と同様に、集落は風水に基づき拝所を中心に形成され、伝統行事が今も続けられているのである。

祭祀行事は、かつてはウフシヌヘー、ヌ



写真 68 ⑬サンケー毛にある大底門中の石碑



写真 69 ⑬サンケー毛にある上間門中の石碑



写真 70 ⑭瀬底区の慰霊塔



写真 71 278 名の戦没者が刻銘されている

ル（ノロ）、神人によっておこなわれており、神人は瀬底の門中である大城、上間、仲田、湧川、仲原、仲程、奥原の門中から出されていたが、その後は大城、上間、仲田の三門中からとなった。ノロは1965年頃まで上間家がつとめていたが、ノロの死後大底門中（大城家）から出され、現在のノロ喜納ツル氏は1975年からつとめている。

少子高齢化と生活環境の変化の中で多くの祭事が縮小簡略化されてきているものの、瀬底区では、区が作成しているカレンダーに旧暦とともに農事暦、区行事、家庭行事、団体行事が月ごとに記載されている。例えば3月であれば、区行事として「ウマッチー：麦の豊作祈願」、家庭行事として「ヒンガン（春の彼岸）、祖霊を供養」とある。拝所での祀り行事は年間20回ほどおこなわれているが、公民館が段取りをして瀬底ノロが執り仕切る。祭祀行事では仏教のようなお経を読むようなことはなく、村民の安全と五穀豊穡を祈る。旧暦の1日と15日はウチャトウの日で休みの日とされ、畑仕事も針仕事もしてはいけないとされていた。現在はそれには従ってはいないものの言い伝えは残っている。

お話を伺ったNPO法人トラバーチンの松本氏によれば、瀬底島には昔から田んぼがなく、稲作の代わりに麦作がおこなわれているが、今でも麦刈りは「ゆいまーる」により子どもからお年寄りまでが総出でおこなわれるという。3年ごとの旧暦8月におこなわれる大綱引きや豊年祭なども、区民が楽しみにしている行事である。子どもの頃から踊りや太鼓、サンシンを習い、伝統の衣装をまとって踊る姿は地域の人々にとっても誇らしいという。区の行事のほとんどは公民館を中心におこなわれ、本部町役場との調整なども選挙で選ばれた区長が3年間の任期で務める。

このように、昔から続く拝所での祈り行事と公民館を中心とした地域行事が、共同体としてのつながりを強固なものにしてきた。それでも代々瀬底島に暮らしてきた人からすれば、以前に比べて人と人とのつながりが薄くなったという。昔の家は仏壇（トートーメ）を中心に一番座、2番座、裏座、台所、板の間と全ての間が開け放たれ、大おじいから孫まで4世代が暮らしていたので、家族の中で

もいろいろな話が筒抜けで、集落内のできごとや家と家のつながり、人と人との関係などあらゆる情報が自然と共有されていた。子どもたちも法事や行事などをよその家に走って伝えに行くことが役割のひとつだった。特に、瀬底大橋ができる前は渡し船だったため、棧橋での待合い時間もコミュニティの場になっていた。島から出入りする人々のことが全て把握されていたのだ。しかし、橋ができ新しいコミュニケーションツールによって生活が便利になる中で、人と人の顔の見える付き合いはすっかり薄れてしまったという。

さらにここ20年ほどの間に移住者が増え、島の人口の約4割が移住者となった。松本氏は自らも20年前に移住してきた一人であるがすっかり瀬底島が好きになり、今では瀬底の拝所について、島中で最もよく知る案内人となった。そして、移住者向けに瀬底島の歴史や文化など概要をまとめた資料を渡し、コミュニティを大事にしている地域であるので理解と協力をと一人ひとりに説明をしているという。しかし中には、こうした地縁の付き合いの煩わしさから遁れたいために島に移住してきたという人もいるという。

そこで、移住者であるナイチャー（県外出身者）と地元の人をつなぐ仕組みを作ろうと、「ヤシの実会」という会を作り、花壇づくりや夏祭りなどの新しいイベントをいろいろと開催してきた。一時は70人ほどにも会員が増え、パソコン教室や高齢者の通院の手伝い、家の中の床直しやテレビの修理など「ゆいまーる」のようなこともしてきた。

しかし松本氏自身も70代になり、気がつく自分たちの後を継ぐ人がいないことに気がつく。そこで、こうしたコミュニケーションの場を継続していけるよう、6年前にNPO法人トラバーチンを立ち上げた。NPO法人の主な目的は地域づくりである。現在の具体的な活動は拝所の草刈りと掃除、拝所の伝承で、メンバーは10人くらいである。50～60代のメンバーが何人かいるので、今後も続けられると考えられている。今後は、瀬底の歴史と文化をより多くの人に知ってもらうために、ガイドマップづくりや案内人の育成などに力を入れていきたいという。

(4) フクギ屋敷林の調査

集落に入ると今泊と同様にフクギが屋敷林として植えられており（図13～15）、入口には若干の高低差があり道も曲がりくねっているなど、風水によって邪気が集落に入らないように形作られている。集落の入口には「この先集落内につき通行禁止」と書かれた立て看板が立てられている（写真①）。集落内の道路は縦横に区画されており、集落ができ始めた当初から計画的に形成されていたようである。

集落内のフクギの屋敷林の被覆率について、先にも取り上げた陳の調査によれば、瀬底地区面積約3平方キロメートルの内、フクギ面積は約1.8平方キロメートルと60%である（陳、pp.187-194）。実際に集落内を歩いて、フクギ林が集落内のどのようなところに植えられているか、管理の状況はどうかといったことに注目しながら調査をおこなった。以下、写真（①～④）により説明する。



図13 集落内の区画された道とフクギ屋敷林の位置図（全体図）



図 14 フクギ屋敷林の位置図（北半分図）
 *○数字は本文中の写真番号



図 15 フクギ屋敷林の位置図（南半分図）
 *○数字は本文中の写真番号



写真① 区事務所前から集落への入口
集落に向かって一段下がっている。立て看板には「この先集落内につき通行禁止」として瀬底ビーチへの矢印が左方向（南）へ向けて書かれている。



写真② 集落の始まりであるウチグシクから祝女火神の入口付近のフクギ屋敷林
この角から瀬底集落の最初の屋敷が建てられた。「左折不可」と書かれた注意書きがある。



写真③ ②から北へ向かう道沿いのフクギ林
きれいに枝が払われている。



写真④ ③の道沿いある空き地のフクギ屋敷林
カミヤー（仏壇）だけが残されている。



写真⑤ 神アサギの東側にある広場の北側
フクギに囲まれた鳥居。



写真⑥ 東側の端から集落内へ入る道



写真⑦ 上間家の屋敷跡

17世紀後半に瀬底へ渡り、2世から5世までが地頭を務めた。



写真⑧ ⑦の屋敷跡の西側のフクギの大木



写真⑨ ⑧から西に進んだ集落内のフクギ屋敷林

右に曲がると「カドヤ製麺所」があり。辻の角には石敢當が置かれている。



写真⑩ 西向きのフクギ林

この道の先に区事務所がある。土帝君は写真右手方向へ行く。



写真⑪ 敷地の端のフクギが伐採された跡

移住者である持ち主の方によれば、鬱蒼として掃除も大変だったので伐採したとのこと。



写真⑫ 空家となった古民家

フクギ屋敷林とともに残されている。



写真⑬ ⑩の古民家の入口にある大きな
フクギ屋敷林



写真⑭ 旧瀬底村の北の端辺り
フクギ林はない。



写真⑮ 中道より北西側の集落への入口
やんばる珈琲の左手側。



写真⑯ 屋敷内の井戸の跡
雨水をためて生活水に使っていた。



写真⑰ 道路の様子
ブロック塀に代わっているところもあるがフクギ林が
断続的に続く。



写真⑱ JA おきなわ瀬底出荷場近くの
フクギ屋敷林



写真⑱ 沖縄民家の屋敷林



写真⑳ フクギ林が途切れる北の端辺り



写真㉑ 琉球石灰岩の石垣とフクギ林



写真㉒ 中道方向のフクギ林の眺め



写真㉓ フクギ並木四辻から中道方向の眺め



写真㉔ フクギ並木の四辻の石垣



写真⑳ フクギ並木の四辻から南方向の眺め



写真㉑ フクギ並木の四辻から西方向の眺め



写真㉒ フクギ並木の四辻から東方向の眺め



写真㉓ テレワークスから東方向の眺め



写真㉔ 西方向に続くフクギのトンネル



写真㉕ フクギに囲まれたヒンプンのある家



写真⑳ 空き地であるが管理されている
フクギ林



写真㉑ 空き地脇の伐採されたフクギ林



写真㉒ 新築の家の庭で伐採されたフクギ林



写真㉓ 枝が伐り揃えられたフクギ林



写真㉔ 集落の西の端のフクギ林
右手側は㉕のサトウキビ畑



写真㉕ 集落の西の端のサトウキビ畑
㉔の右手側



写真⑳ 集落の南西端のフクギ林



写真㉑ 集落の南西端のフクギ林
㉑の位置から東方向



写真㉒ 空き地の周りのフクギ林
㉑の位置から東方向。



写真㉓ 沖縄民家のフクギ屋敷林
(あまはじ)



写真㉔ 集落の西の端のフクギ林
東方向の眺め。道の後ろは海岸方向でフクギ林はない。



写真㉕ NPO 法人トラバーチンの事務所
集落の西南端。この辺りからフクギ林はない。



写真④③ フクギ林の根元がコンクリートで固められた中道近くの並木。



写真④④ 区事務所前附近の中道から集落への入口
コンクリートブロックの塀となっている。

(5) フクギ林の保全管理と地域課題

以上のとおり、瀬底区内のフクギ屋敷林を歩いて調査したところ、一部伐採されたりコンクリートブロックの塀になっている所はあるものの、特に碁盤の目の中心部周辺は屋敷林が繋がって並木のように見られるところもあった。フクギ林の東西南北の端については、はっきりと区画されているものではないが、ある程度把握することができ、瀬底集落の始まりであるウチグシクから、徐々に西北方面へと集落が広がっていったことも確認することができた。

松本氏によれば、移住することを決めて住居地を探していたところ、住民からはフクギ林の中に住まいをした方が良いと言われたという。フクギ林の中は風水で守られているが、それより外側に住むと悪いことが起こるとのことだった。しかし、丁度良い物件が南西の端の方にあり、フクギ林からはやや離れていたが住むことに決めたところ、その後現在まで特に悪いことも起こらず、平穏に過ごせているとのことであった。

あまはじの藤野氏は埼玉県出身で、建築士として北海道に本拠を持つランドスケープの設計事務所に務めた後、東京にある建築事務所に16年間勤務した。結婚を機にパートナーの故郷である沖縄へ移住し設計事務所を設立した。夫婦とも建築・ランドスケープデザインを専門にしており、移住に当たって

求めた考えとしては、沖縄の自然に沿った暮らし方であったという。そこでいろいろと苦勞をして築50年の琉球古民家を探し出し、自らリフォームをして職住一体の生活を始めた。断熱材もクーラーもないがフクギ屋敷林に囲まれ、実に風通しがよく心地よい家屋である(写真④⑤)。

フクギの保全管理について藤野氏に聞いたところ、集落として特にルールはなく所有者に任せられており、何も手入れをされていないフクギや、チェーンソーで垂直にカットされているフクギ、キレイに剪定されているフクギまで様々であるという。そのことが備瀬と比べると逆に自然な感じがするとのことだった。パートナーの菜々恵氏は、最近、家の近くの新築工事に当たって、屋敷林となっていた大きなフクギが伐採されてしまい、とても残念に思っているとのことであった。

備瀬地区は海岸線に沿って集落が形成されており、海風が直に当たるため海側は二重に植林され「抱護」という集落を取り囲むようにフクギ林が植えられているが、瀬底地区の集落は島の中心部分に形成されているため、備瀬地区のように周りが分厚く取り囲まれてはいない。むしろ今泊地区のように屋敷ごとに囲まれている。そのためか、フクギの管理も屋敷ごとにおこなわれており、ブロック塀に変えられたところなどフクギ林が途切れているところも多くあった。特に集落の周縁附



アンチ浜

瀬底大橋を渡ってすぐ左に曲がり、坂を下るとアンチ浜のビーチがあります。海水浴やマリンスポーツが楽しめ、パラソルや浮き輪等の貸し出しもおこなっています。波打ち際からすぐ近くに珊瑚が生息しており、浅いながら熱帯魚たちの姿をたくさん見ることができます。

瀬底ビーチ

瀬底大橋を渡り、新しくできた道路をゆったりとドライブしたら瀬底ビーチへ到着。そこはパラダイスビーチ。魅惑的なブルーをたたえて迎えてくれる。海は遠慮で海水浴に最適です。海水浴シーズンには売店もオープンし、家族連れや若者たちでにぎわいます。ビーチから眺める伊江島や水納島の情景も美しく特に這む夕日が周囲を染めていく様子は圧巻で、夕日スポットとしても人気のビーチです。



瀬底ビーチ



瀬底ビーチの夕日

瀬底行政区

〒905-0227 沖縄県国頭郡本部町瀬底 69-1 番地
TEL/FAX0980-47-3741



瀬底大橋

図 16 「瀬底島住民憲章」(表面)

近では根元に近い幹から伐採されているところも見受けられた。

フクギの葉や実の活用については現在のところ瀬底では特におこなわれていないとのことであったが、藤野氏は大宜味村の「やんばる森のがっこう」という取り組みに家族ぐるみで参加して、フクギの葉や樹皮を煮て染物体験をするなど楽しんでいるとのことであった。

瀬底島といえばビーチとカフェで観光客や若者に人気のスポットとなっているが、観光客による問題はないかを聞いたところ、かつては道に迷ったレンタカーが入り込むといったこともあったが、瀬底一周道路が開通したことで集落内に入ってくることはあまりなくなったとのことであった。備瀬地区のようにフクギ林を目当てにくる人もあまりいない

ようである。集落内の宿泊施設としては一棟貸しをしているところが多くあるが、観光客によるゴミのポイ捨てや騒音といった問題はあまりないとのことであった。

しかし、2020年にヒルトン沖縄瀬底リゾートが完成し観光客の来島が多くなったことに加え、瀬底一周線が完成したことにより道路沿いの敷地での開発が進み、住民も増加すると予想されるため、瀬底区としてなんらかのルールがあったほうが良いのではないかとの話が出され、「瀬底島住民憲章」を作成しようという動きにつながったとのことである。

(6) 瀬底区長の聞き取り調査

次に、瀬底区長の内間清彦氏に「瀬底島住民憲章」や瀬底の文化継承などについてお話を伺った。

瀬底島住民憲章

【目的】

第1条 この憲章は、先祖から受け継いできた豊かで美しい自然、伝統的集落、御嶽や拝所等聖地の保存、伝統芸能文化の継承と、安心・安全で静かな生活を守ることを目的とする。

【住民の誇り】

第2条 長い間培ってきた結（助け合い）の心、有難うという感謝の心、お年寄りや子供を大切にしやすい心を持ち続けます。

【住民のルール】

第3条 私たちは、島を守る為に次のように取り組みます。

- 1 自然の景観を守る為。
 - (1) 自分たち島の、素晴らしい自然環境を知る事を心がけます。
 - (2) いかなる場所にも、ゴミを廃棄したりポイ捨てはしない。
 - (3) 自宅敷地内、周辺を綺麗に保つと共に、定期的に島全体のクリーン活動を行います。
 - (4) 廃屋・空家の撤去要請や家主自ら撤去するよう心がけること。
 - (5) 責任あるペットの飼育方をします。
- 2 農地を守り活かす為。
 - (1) なるべく農地は売らないようにし、農業振興地域を守る意識を高めます。
 - (2) 耕作放棄地の解消に努め、田園風景の保全に努めます。
 - (3) 農地への開発については、周辺の田園風景に十分配慮します。
- 3 伝統的な集落や御嶽・拝所等の聖地を守る為。
 - (1) 福木屋敷林や石垣等伝統的な景観要素を大事にします。
 - (2) 歴史的建造物や祭事ごとが行われる空間等においては、その周辺も含めて保存に努めます。
 - (3) 集落内の大木や御嶽等拝所近くの大木については、その保全に努めます。
 - (4) 御嶽・拝所等は神聖な場所であり、むやみやたらに入らないようにする。
- 4 伝統的芸能や文化を守り活かす為。
 - (1) 島の祭行事や豊年祭・夏まつり等の諸行事には、積極的に参加します。
 - (2) 子供達に三線・踊り等を指導して、学校行事にも取り入れ、伝統芸能・文化の大切さを教えます。同時に私運大人も、伝統芸能・文化を理解し継承に努めます。
 - (3) 観光客等を取り込んだイベントを開催します。
 - (4) 芸能・文化を網羅した企画展を開催します。

5 乱開発から島を守る為。

- (1) 事業者は、本部町の開発事業等に関する指導要綱を遵守すると共に町の指導に従うこと。
- (2) 事業者は、当該事業計画を十分に説明し、地域住民・隣接地主等及び利害関係者の十分な理解を得ること。
- (3) 土地を売却する場合は島民や定住を希望する人を優先に島の発展を第一に考えよう。
- 6 安心・安全な地域づくりの為。
 - (1) 島内での車のスピードは減速し安全運転に心がけ、自転車等の運転にもルールを守ること。
 - (2) 路上での迷惑駐車はやめること。
 - (3) 火気の使用には、十分気を付けること。

【観光関連業者のルール】

第4条 島の良さを印象づけるのに、観光関連業者の規律ある接遇が、大きく左右する。したがって、以下のルールを遵守しましょう。

- (1) 島の歴史や文化を理解し、自然景観等の情報も提供する。
- (2) 来島者の安全を最優先に考え、観光体験やアクティビティの安全性を確保する。
- (3) 競争するのではなく、共に発展できる雰囲気作りをする。
- (4) 観光客に地元の芸能・文化に触れる機会を提供する。

【来島者のルール】

第5条 瀬底島への来島者は、以下のルールを守るようにしましょう。

- (1) いかなる場所においても、ペットやゴミを投棄したり放置したりしないようにしましょう。
- (2) 島内での車のスピードは減速し安全運転を心がけましょう。
- (3) 住民の通行を妨げるような駐車や迷惑行為はやめましょう。
- (4) 夜遅くまで騒いだり、近隣住民の迷惑にならないようにしましょう。
- (5) 住民の敷地へは入らないようにしましょう。
- (6) 御嶽・拝所等は神聖な場所であり、必要以外には入らないようにしましょう。
- (7) 写真撮影には、住民のプライバシーを尊重し本人の許可を得ることにしましょう。
- (8) ドローンでの集落内の撮影は禁止し、他の場所においては区事務所へ連絡を行うようにしましょう。
- (9) 集落内で水着姿や上半身裸で行動することはやめましょう。

令和6年2月吉日

We love Sesoko Island

図 17 「瀬底島住民憲章」(中面)

(ア)「瀬底島住民憲章」について
「瀬底島住民憲章」(以下、「住民憲章」)(図 16・17))を作ることになったきっかけは、2021年に数十人の若い有志の方から、ヒルトンホテルができたり 2022年に瀬底一周線ができるということで観光客が多くなって島がどうなるかわからない、この景観が守れるか心配だという声があり、何かルールのようなものを作ってほしいという要望があったからということである。この問題については歴代の区長たちも課題と思っていたところであるが、何から手を付ければいいのかかわからない状況だった。そこで 2022年から 2023年にかけて県の地域振興研究助成事業を活用して、まず住民で話し合うワークショップを開催することとし、ワークショップに先立ってアンケート調査を実施した。

住民アンケートの実施に当たっては「瀬底景観保存委員会」(以下「保存委員会」という。)を立ち上げてアンケート項目を作成した。田舎のことなので、いきなりワークショップを開催しても意見が出ないため、あらかじめアンケート調査を実施しそれを基に説明会と意見を聞くことにしたという。

アンケート項目は 9 項目あり、項目の主な内容は「住民の誇りは何ですか？住民のルールとして大事なものは住民の誇りどんなことですか？観光業者や来島者のルールはどんなことですか？」などで、すべて自由記述とした。アンケートは全世帯に配布し、その結果をまとめて区民を 9 班に分けて説明会を開催した。瀬底小学校の 4 年生から 6 年生の生徒にもアンケートを配布して意見を聞いた。アンケートでは良い意見がたくさん出されて

いたが、中でも移住者の若い人たちがいい意見を出してくれたという。移住者は人口の3～4割にもなっており、瀬底島の自然や文化の環境が好きで移住して来たので守ってほしいという意見が多く出された。説明会への参加者は全体で50～60人とそれほど多くはなかったが、不参加者は賛成意見だと思って住民憲章をまとめた。住民説明会に出席した方からは建設的な意見が出され、保存委員会も5回開催してそれらを基に住民憲章を作成した(図16・17)。作成部数は5,000部で今後、町の広報などで周知していきたいと思っている。観光客向けにもヒルトンホテルや観光業者、飲食店などに置いて見ていただけるようにしたいと考えているとのことであった。

(イ) 現在のフクギの管理状況について

フクギの管理は基本的には各家の所有者に任せているが、40～50年前は新築という台風対策として鉄筋コンクリートの建物でフクギも伐採してブロック塀にされるところが多かったが、最近はフクギを残されるところが増えてきている。道が狭い所は伐採されたりしているが、敷地の広いところはフクギを防風林として残されている。車が通るのに邪魔になったところはお近所で相談されながら枝を払っておられる。電柱に掛かってきたところは電力会社に連絡している。

瀬底のフクギ林の始まりについては、1700年代の蔡温の森林政策の頃から植えられたといわれている。村民は蔡温を迎えるためにケーガーの近くにチンガーというため池を作った。蔡温は集落づくりを進めるにあたって道を碁盤の目のようにして防風林としてフクギを植えた。リュウキュウマツも蔡温が中国から持ち込んだといわれているが、山林政策として3本木を伐ったら5本植えよと言いつけられてきている。

空き地や空き家になっているところもフクギ林が残されているが、南部に働きに出て行った人たちがいつか戻ってくるだろうということでカミヤーだけが残されており、フクギもそのままになっている。中にはもう戻る見込みがなくなって売りに出されている所もあり、今後フクギをどう管理していくかは課

題であるとのことであった。

(ウ) 瀬底の文化や伝統芸能の継承について

伝統行事は昔から大事に継承してきているが、その中のひとつとして「繫心会」(けいしんかい)という会を2014年に作り、30～50代の10人くらいが伝統芸能を守っていこうということで練習を続けている。内容はサンシンや太鼓、踊りなどで、豊年祭や夏祭りで披露している。エイサーや手踊りは別の会がある。サンシンや踊りは小学生の子どもたちも放課後に練習している。先生方は地元の人たちでボランティアで教えてくださっている。

移住者の人たちも協力的に練習に参加しておられ、旧暦の8月(現在の9月)におこなわれる綱引きにも重要な戦力として参加している。綱づくりは一ヶ月ほど前から作りはじめ、稲わらは金武町の伊芸地区に依頼しており、6,000斤(1斤=600グラム)約3,600キログラムを使う。大綱引きは区事務所前の中道で南北に分かれておこなうが、その時の人口割で地区を分けている。

瀬底は米作をしない代わりに麦作をしてきた。麦藁を使ったムンジュル笠も伝統工芸の継承の方がおられ、技術の継承もしてきたが、とうとう途絶えてしまった。麦の栽培も減ってきている。

(エ) 今後の取組みについて

住民憲章の周知や瀬底拝所マップの活用については、今後特に観光客の無断立ち入りがないように、案内板や立ち入り禁止の設置なども検討していきたい。できれば「もとぶんちゅ観光ガイド」のような瀬底島の案内人を育成して、ルールを守りながら知ってもらえるしくみをつくっていければと思う。それらも保存会委員会で検討しながら若い人を中心に進めていきたい。

観光振興というのは瀬底地区では特にしていない。本部町の観光協会からこうしたらどうかといった形で連絡があるが、こちらから積極的にしているものではない。ドローンの撮影について問い合わせがあるが、住民に迷惑がかからないようにしていただくようお願いしている。観光客が入ってくる前にルー

ルを作って瀬底を守っていきたいとのことであった。

(7) 小括

本部町備瀬地区と瀬底地区のフクギ林について比較したところ、先にも取り上げた陳の調査によれば、本部町備瀬地区は面積1.46平方キロメートルの内70%であるが、瀬底地区は約3平方キロメートルの内フクギ面積は約1.8平方キロメートルと60%である。今帰仁村今泊地区の面積は約5平方キロメートルでフクギの面積は約3平方キロメートル、約60%とされている(陳、pp.187-194)。瀬底地区は備瀬地区に比べて被覆率は低いものの、島の地形に沿って御嶽や拝所が配置され、島の中央の高低差のないところを中心に風水に基づいた集落が形成されている。

なかでも御嶽や拝所については、先史時代や古代に何らかの始まりがあり、中世から近世へと歴史をつなぎ、現在まで祈りの場として、自然の姿のままに受け継がれ存在していることは驚きである。こうした拝所を大切にす住民によって受け継がれている祭事の実施や伝統芸能の保存と継承の取り組みは貴重であり、瀬底島固有の風土と文化がよく保持されているといえる。

特に、瀬底島一周線の開通により観光客や移住者が増えると予想されることから、瀬底地区の自然と伝統文化を守るために住民憲章が策定され、様々な問題やトラブルが起こる前にあらかじめルール作りが進められている。また、区やNPO法人トラバーチンといった主体が自主的に清掃や美化活動に取り組んでおり、移住者が増加している中でもコミュニティの維持と結束が保たれている。

このように、重要文化的景観の選定を受けて保存と活用を進めている今泊地区や景観形成重点地区として保全・活用が進められている備瀬地区とは手法は異なるものの、住民が自主的、主体的に瀬底島の自然と文化を象徴するフクギ林と拝所を守っていきこうとしており、今後の取り組みの具体化と成果が期待される。

その中でも今後期待される考え方や方法のひとつとして、今回の調査でお世話にな

ったNPO法人トラバーチンの取組みと一級建築士事務所事務所「あまはじ」の藤野氏の考え方が参考になると考える。NPO法人トラバーチンについては、先に紹介したとおり移住者と住民をつなぐ機会や場づくりとして清掃活動やイベントを実施しており、町や区といった行政のしくみによる活動も重要であるが、こうした住民の自主性に委ねた活動も若い人たちや移住者と楽しみながら一緒に進めていく上で大変重要になると考えられる。どのような取組みも強制や規則だけでは継続が難しい。参加の自由と各自の能力の発揮が継続の要であると考えられる。また、住民と移住者・若者をつなぐコミュニケーション能力とリーダー性を備えた人材も重要である。

あまはじの藤野氏家族も移住者の一組であるが、瀬底島に移住するにあたって大切に考えた考え方が「あまはじ」であった。「あまはじ」とは雨のはしっこという沖縄独特の言葉であるが、内でもなく外でもない半屋外の空間を家の造りに用いることを建築のコンセプトにしたのである。これは、移住のために東京から沖縄へ移動する2週間の間に各地の社寺や温泉地などを巡り、日本の伝統的な建築物の特徴でもある軒先、縁側といったあいまいな空間の持つ素晴らしさに気づき、建築士としてのコンセプトもそこに置くことにしたという。

「あまはじ」は風や光を自然に取り込むとともに、縁側に気軽に腰掛けて談笑できるといったコミュニケーションの場となる機能も兼ね備え、住民や移住者、来迎者など様々な人々との交流の場にもなる。藤野氏はこうした考え方を公共建築にも用い、住民の参加型でワークショップを重ねながらみんなで作っていくことを大事にしている。こうしたノウハウも地域づくりに生かすことができる。

このような移住者の「沖縄らしい、瀬底らしい風土」を大切にす視点は、長く島に暮らしている中で逆に気づきにくい点でもある。人口の島外流出や少子高齢化の中で、瀬底の自然と文化をどのように継承していくかを考えるとき、移住者や外部者の視点は新しい気づきを与えてくれ、先の内間区長のお話にもあったように、移住者の方が建設的な意見を出してくれることもある。伝統をそのま

まに継承していくことはもはや現実的ではない中で、これから島に住んでいく人たちの参加のしくみをつくっていくことが求められる。

伝統を少しずつ変えながらも守り続けた自然と歴史・文化は何なのか、交流の場と参加のしくみを生かしながら、伝統的な知恵と文化を現代の価値観で捉え直し問い続けていくことが大事であるといえよう。

VI. 全体のまとめ

今帰仁村今泊のフクギ屋敷林と集落景観の保存・活用を図るために、今後どのような考え方や方法で進めていけばいいのかを検討するため、2022年6月から今帰仁村今泊地区、今帰仁村歴史文化センター、一般社団法人今帰仁村観光協会、今帰仁村中央公民館、本部町備瀬地区、瀬底地区の6か所において調査を実施してきた。

本研究では、「文化的景観の価値を活かした地域づくり」として二つの視点を持ちながら沖縄県以外に京都府宮津市溝尻や愛媛県西予市狩浜などでも調査研究をおこなってきた。二つの視点のひとつは重要文化的景観の本質的価値をどうとらえるのかという基本論の視点であり、もうひとつは、その価値を具体的にどのような方法で地域づくりに落とし込んでいくのかという計画論の視点である。

今回の今帰仁村及び本部町での調査では、上記の二つの視点のうち特に二つ目の「地域づくりにどう生かすか」という視点に重点が置かれることとなった。無論、本質的価値の視点においても大いに参考になる点があったが、聞き取り調査やワークショップをする中で、関係者が最も気に掛けていた課題が「観光化による生活への影響」であったことから、「地域づくりにどう生かすか」という点がクローズアップされた形となった。

これらの調査からそれぞれの視点について結論を出すには尚早であり、今後も引き続き調査と検討が必要であるが、ひとまず課題を整理しておこう。

それぞれの小括でも触れたように、文化的景観の価値をどう地域づくりに生かすかという点において重要であるのは、一つは多様な主体の連携の仕組みづくりである。自然環境や生活環境を守りながら経済的にも回る仕組みの構築を誰がどのように作っていくのかという点においては、事業者や移住者、地区住民、ボランティアなど多様な関係者との連携を図りながら議論を重ねていくことが重要である。

この視点から見た今泊地区の課題としては、今泊地区でのワークショップにおいても意見が出されていたように、多様な各主体を

束ねて議論や活動の場を用意する中心的存在が見えにくいように状況にあるという点である。これについては、2023年3月に策定された「整備計画」の中で、景観やまちづくりに関心の高い住民グループ「フパルシ会」の立ち上げについて触れられており、今後の活躍が期待される。

「中心的存在」については、本部町の備瀬地区と瀬底地区においても同様の課題があり、観光協会や地区事務所といった公共的な機関の役割が重要であるのは無論のことであるが、民間団体や住民も含めて、多様な主体が自律的に動ける仕組みづくりについては今後の課題であるように思われた。

二つ目は民間や地域住民、子どももお年寄りも移住者も、誰もが主体となって楽しく参画できる機会や場の創出である。フクギ並木の掃除、フクギ染め、中央公民館修繕ワークショップ、夜市、ガイド役など、自分の持てる能力や興味関心に合ったことを実際に生かしてみたいという意欲的な村民や移住者が多くいる。そうした創造性のある芽をつぶさないように、行政や観光協会が育てる場や機会を用意していくことが大事であると思われた。

その際に、今泊地区であれば、今泊のフクギだけをとらえて場を用意するのではなく、他の地区や関連するテーマも含めて広く今帰仁村全体を視点に入れながら場の創出をしてはどうかと考える。これは今帰仁村関係者へのヒアリングで出された意見として、世界遺産や文化的景観など今泊地区だけが際立って配慮されているといった声が他の地区から出されており、地域づくりに対する意識に地域格差があるとのことであったことから、意識をして進めていく必要があると思われる。こうした地域格差の意識を無くしていくためにも、それぞれの地区の特徴を活かしながら他の地区との連携を図れるようなイベントや交流事業を立案し、多様な文化的資源の活用を今帰仁村全体に生かせるような取組みが求められる。

また、本部町においては「備瀬のフクギ」が美ら海水族館を訪れた人たちの次の観光先として取り上げられたことで一挙に観光客が訪れ、生活や文化に影響が現れてオーバーツ

ーリズムの弊害も生まれてきている。本部町全体として、入り込み客数や経済的効果のみを目標に観光政策を推進していくことになれば、住民の生活や地域の自然・文化とのバランスを崩すことになり本末転倒の地域政策となってしまう。

一方で瀬底地区においては、観光客によるオーバーツーリズムの弊害を未然に防ぐため「瀬底島憲章」を作成し、拝所とフクギを守るための決まり事を住民と観光客の両方に周知するべく行動を起こした。「瀬底島憲章」の作成過程において、住民アンケートを基にしたという点においても、住民が憲章を守るために参加しやすい前提ができ、実行段階における効果が高められると考えられる。こうした取組みは、他の地区においても参考になる。今後はこの「瀬底島憲章」を誰がどのように実行させていくかという点が重要である。

三つ目は、もう一つの基本論の視点である文化的景観の本質的価値をどうとらえるかにも関わるが、今帰仁城跡、フクギ林、ビーチといった目に見える景観だけでなく、今泊であれば豊年祭や夜市、今帰仁マーイ（廻り）、備瀬や瀬底であれば御嶽、拝所、祭り、ウガン行事といった住民のこころの奥で共有されている目に見えない大切な祈りや記憶といった「こころの景観」をいかに守っていくかという点である。

今泊地区では若い世代はノロや祭祀行事に関心がなく、祭祀行事がない新しい集落へ居住することが好まれる、といった傾向もあるとのことであった。2019年に宜野湾市で調査を実施した拝所行事においても、生活の近代化や核家族化が進む中で、住民の自然信仰や守り神への崇拜、祖霊信仰は次第に薄れてきており、かつては共同体の紐帯となってきた祭祀は、現在では「綱引き」にその意思が受け継がれているのではないかと思われた（奥谷 2020）。時代の変化の中で住民の意識も変化し信仰の形態も変わってきてはいるものの、今泊、備瀬、瀬底のいずれの地区でも住民のこころをつなぐ行事や祭りが受け継がれていることを確かに感じる事ができた。

以上のことから、「文化的景観の活用＝都市計画×観光政策」ではなく、これまでの科

や西予市狩浜の秋祭りのように（奥谷 2022、2024）、祭りを通じて住民のこころの奥で共有される言葉に表しにくいけれど確かに感じられる非日常の領域こそが、地域の誇りと愛着を生み出し、住民同士が協力し合って様々な活動をしようという動きに結びついていると考えられる。

このため、観光客向けの地域資源の活用ばかりに注目するのではなく、「見えない景観」である住民にとって最も大切に神聖な場や行事の保存と継承にこそ、まず力を入れていくことが大事であるといえよう。

この点においては、今帰仁村今泊、本部町備瀬、瀬底のいずれの地区でも拝所や御嶽を大事にし、今も昔から続く伝統行事を大切に子どもたちや移住者に伝承されている。元々その地域に住み始めた人たちに敬意を払い、フクギ屋敷林や並木をはじめ地域の自然と暮らしを守るために配置されている拝所や御嶽を大切に、地区の根本となる場所とこころの在りを最かも大事にされていると思われる。

また、別の論点からではあるが、今泊地区と備瀬地区のフクギ屋敷林を比較し、「備瀬地区はなぜ重要文化的景観に選定されなかったのか」について論じた岩本（2024）によれば、重要文化的景観の選定を目指すうえでは、当該地域の資源の量的側面だけを問題とするのではなく、行政をはじめとする地域社会が景観計画をどのように策定していくのかという方針のあり方などの方が大切であるといった分析がなされている。

景観の価値やその土地の持つ歴史を含んだ文化的な価値を、地域住民をはじめとした多様な主体がどのように捉え、価値を共有するかが最も大事であると考えられる。

他にも表出すべきところはあると思われるが、以上のとおり「多様な主体の連携の仕組みづくり」、「誰もが楽しく参画できる機会や場の創出」、「伝統的な文化とこころの継承」という三つの要素が有機的につながることで、文化的な景観を活かした地域づくりがよりよく進んでいくのではないかと考えられる。

<謝辞>

この度の調査では、次の皆さんにお世話になりました。お忙しい中、貴重なお話を聞かせていただき誠にありがとうございました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

- ・今帰仁村教育委員会 今帰仁村歴史文化センター館長玉城靖様
- ・今帰仁村役場 建設課平良成健様、松田竜治様
- ・今帰仁村役場 企画財政課仲原雅宏様
- ・一般社団法人今帰仁村観光協会 事務局長横澤一美様、金城卓美様
- ・一級建築士事務所あまはじ 藤野敬史様、藤野菜々恵様
- ・NPO 法人天橋作事組 羽田野まどか様
- ・ウェルビーイングなきじん夜市実行委員会委員 長石川清和様
- ・一般社団法人本部町観光協会 会長當山清博様、事務局長代行崎浜秀明様
- ・瀬底区 区長内間清彦様
- ・NPO 法人瀬底トラバーチン 松本直也様

<参考文献>

- 岩本廣美（2024）「文化的景観をつくるフクギ屋敷林の保全に関する一考察 ―沖縄県本部町備瀬地区及び今帰仁村今泊地区の事例を中心に―」『まちづくり論文集「地域創造」』62。
- 上杉和央（2020）『歴史は景観から読み解ける―はじめの歴史地理学』ベレ出版。
- 奥谷三穂（2020）「沖縄における拝所の信仰 ―宜野湾市嘉数区・大山区・真志喜区の調査から―」『宜野湾市 2019年度地理学実習現地報告書』京都府立大学文学部歴史学科文化遺産コース（上杉研究室）。
- 奥谷三穂（2022）「文化的景観における無形の本質的価値に関する考察―宮津市溝尻地区の舟屋景観をめぐる―」『文化経済学』19（1）、93-105。
- 奥谷三穂（2024）「文化的景観における「祭り」の意義に関する考察―宮津市溝尻地区の葵祭と西予市狩浜地区の秋祭りを事例に―」『文化経済学』21（1）、26-45。
- 金田章裕（2012）『文化的景観 生活となりわいの物語』日本経済新聞出版社。
- 清水潤（文）、北田英治（写真）（2023）「人をつないで使われ続ける 象設計集団+アトリ

エ・モビル 今帰仁中央公民館と進修館」
『コンフォルト』191。

瀬底誌編集委員会（1995）『瀬底誌』本部町瀬底。
陳碧霞（2019）『近世琉球の風水と集落景観』榕樹
書林。
陳碧霞（2023）『琉球列島のフクギ並木』南方新社。
仲間勇栄（文）、来間玄次（写真）（2021）『福木巨
木の巡礼誌』編集工房東洋企画。
今帰仁村教育委員会（2018）『今帰仁村今泊のフク
ギ集落景観 調査報告書・保存計画書』今
帰仁村教育委員会。
今帰仁村教育委員会（2023）『重要文化的景観「今
帰仁村今泊のフクギ屋敷林と集落景観」整
備計画書』今帰仁村教育委員会。
湧上元雄、大城秀子（1997）『沖縄の聖地 拝所と
御嶽』むぎ社。

<受領資料>

（一社）今帰仁村観光協会「第3次今帰仁村観光リ
ゾート振興計画」抜粋、平成31年今帰仁
村役場
（一社）今帰仁村観光協会「今帰仁村教育民泊 今
帰仁村内の戦争遺構をめぐるツアー 概
要」2021年
（一社）今帰仁村観光協会「今帰仁村観光パンフレ
ット」、「観光マップ」
瀬底区事務所「瀬底島住民憲章」

〈表紙・裏表紙の写真解説〉

- 表 右上 東草野の山村景観（滋賀県米原市）
上 伊庭内湖の農村景観（滋賀県東近江市）
左上 奥内の棚田及び農山村景観（愛媛県松野町）
中央 今帰仁村今泊のフクギ屋敷林と集落景観（沖縄県今帰仁村）
- 裏 中央 宇和海狩浜の段畑と農漁村景観（愛媛県西予市）



京都府立大学文化遺産叢書 第32集

「地域らしさ」を磨く

—文化的景観の価値と地域づくり—

編集 上杉和央
発行 京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522 京都市左京区下賀茂半木町 1-5
発行日 2024年10月26日
印刷 株式会社 北斗プリント社
〒606-8540 京都市左京区下賀茂喬木町 38-2